

第一部

● 自己紹介

百崎：みなさま、本日は「特命子ども地域アクター成果発表会」へ、ようこそお越しいただきました。本日、自己紹介の担当をします、橘学苑高校1年生の百崎佑です。よろしくお願いいたします。

橋本：同じく中川中学校1年生の橋本みなみです。本日はよろしくお願いいたします。

百崎：それでは特命子ども地域アクターのみなさんに登場してもらいたと思います。横浜市立城郷小学校5年生、州濱泰くん。

州濱：州濱泰です。よろしくお願いいたします。

橋本：横浜市立南山田小学校5年生、山田大輝くん。

山田：山田大輝です。小学5年生です。よろしくお願いいたします。

百崎：横浜市立東山田小学校6年生、市川姫菜さん。

市川：精一杯頑張るので、よろしくお願いいたします。

橋本：横浜市立川和東小学校6年生、神田沙緒里さん。

神田：緊張しているけど頑張ります。

百崎：横浜市立都田小学校6年生、清水八雲くん。

清水：みなさん来ていただき、ありがとうございます。

橋本：横浜市立西梶ヶ谷小学校6年生、田島春那さん。

田島：忙しいのに来ていただき、ありがとうございます。よろしくお願いいたします。

百崎：横浜市立都田西小学校6年生、森田智大くん。

森田：森田智大です。今日は楽しくやりたいと思います。よろしくお願いいたします。

橋本：横浜市立篠原中学校1年生、州濱森くん。

州濱：州濱森です。今日一日、よろしくお願いいたします。

百崎：横浜市立中川西中学校1年生、草郷紗麗さん。

草郷：草郷紗麗です。今日は一生懸命頑張ります。よろしくお願いいたします。

橋本：横浜市立中川中学校1年生、山部日花里さん。

山部：今日はよろしくお願いいたします。

百崎：横浜市立今宿中学校1年生、結城凛太郎くん。

結城：みなさん、こんにちは。今日はよろしくお願いいたします。

橋本：横浜市立中山中学校2年生、黒川睦未さん。

黒川：黒川睦未です。今日は来てくれてありがとうございます。

百崎：横浜市立荏田南中学校2年生、直枝遼菜くん。

直枝：中学2年の直枝遼菜です。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

橋本：山北町立山北中学校3年生、杉本葵さん。

杉本：杉本葵です。山北町から来ました。よろしくお願いいたします。

百崎：山北町立山北中学校3年生、高橋亜仁多さん。

高橋（あ）：高橋亜仁多です。今日は遠い山北町から来ました。よろしくお願いいたします。

橋本：山北町立山北中学校3年生、三木麻里奈さん。

三木：三木麻里奈です。今日は来て下さってありがとうございます。

百崎：山北町立山北中学校3年生、茂川亜実さん。

茂川：茂川亜実です。今日は神奈川県ここから来ました。よろしくお願いします。

橋本：川崎市立東橋中学校3年生、矢野颯人くん。

矢野：矢野颯人です、メリークリスマス。

百崎：中央大学付属横浜高等学校1年生、福永圭吾くん。

福永：高校1年、福永圭吾です。本日はお越し下さいましてありがとうございます。最後まで、ぜひ見て行ってください。よろしくお願いします。

橋本：横浜商科大学高等学校2年生、井藤千莉さん。

井藤：井藤千莉です。今日は来て下さってありがとうございます。よろしくお願いします。

百崎：山手学院高等学校2年生、高橋智樹くん。

高橋（智）：高橋智樹です。今日はご来場ありがとうございました。アクター1年目ですが、よろしくお願いします。

橋本：横浜翠陵高校2年生、矢野淳奈さん。

矢野：矢野淳奈です。今日は来てくださりありがとうございます。よろしくお願いします。

百崎：神奈川県立神奈川工業高校3年生、加治満里奈さん。

かじ：こんにちは、加治満里奈です、今日は頑張るのでよろしくお願いします。

橋本：神奈川県立神奈川工業高校3年生、松澤海斗くん。

松沢：松澤海斗です。緊張して手汗がものすごい出てるんですが、元気です。

百崎：以上で、特命子ども地域アクターの紹介を終わります。

橋本：本日、14人の欠席がありましたが、今日のメンバーで頑張ります。よろしくお願いします。

● 事業説明

岩室：百崎くん、橋本さん、急に頼まれたにもかかわらず、やっていただきありがとうございます。みなさん、たくさん来ていただき、ありがとうございます。全体の司会をします、NPO法人ミニシティプラスの事務局長の岩室晶子と申します。よろしくお願いします。堅苦しい感じだと、子ども達の発言もあまり出ませんので、気楽な感じで進めていきたいと思えます。

それでは最初に、三輪さんに事業全体の説明をしていただき、それからそのあと各団体の方たちに、今回アクターを招いてどんなことをしたかを、私のインタビュー答える形でお話いただきます。それについて子ども達から多少コメントをもらうかもしれません。15団体ありますので、だいたいそれで1時間ぐらいはかかってしまいます。一旦休憩をいただき、その休憩の間に、ご質問を書きいただき、あとでお答えしていきたいと思えます。

後半は、子ども達に、みなさんの方を向くような形で座ってもらったりして、ラフなトークを行っていききたいと思えます。

方たちに、一言ずつコメントをいただきたいと思えます。これが今日の流れです。ということで、最初の事業の説明に移っていきます、三輪さん、よろしくお願いします。

三輪：あらためまして、みなさんこんにちは。ミニシティプラスの理事長を務めております、

本業は横浜市立大学の都市学系まちづくりコースの方で授業もしています。三輪と申します。まず、最初にこの事業全体と、これから目指そうとしているところを簡潔に説明したいと思います。まずこの事業ですが、「子どもと地域を繋いでいく、そういう社会をどういう風に作っていくか」ということが一番大きなテーマになっています。

子ども達は今、家と学校と塾を行き来するだけの、「**専門子ども**」というような名前と呼ばれていて、なかなかいろんな**大人と関わる機会**がなかったり、**コミュニケーション**が取りにくかったり、というようなことも問題に掲げられています。また遊んだり、暮らしたりという時に、地域の資源を使うことが出来なかったりしていて、そういうことが非常に問題になっています。

そこで子どもの社会参画をどのように推進すればいいのか、(私もちょっと絡んでいましたが) **神奈川県青少年問題協議会**で議論されたりもします。今後、次世代を担う子ども達がなかなか社会と関わる術を身に付けられないんじゃないかというような恐れがあります。

一方で、**地域の方は人口減少社会**という形で今、非常に取沙汰されていますけれども、例えばまちづくりの現場においては、**高齢化**だったり、**担い手の固定化**があり、そこにはどうしても若い人達をなんとか取り込みたい、というお話がいろいろ出ます。

ところが子ども達、まさに小学校高学年から中高生までですが、その子たち自身がまちづくりの活動に参加をすることは少なく、どちらかというとお客様のように扱われていたりします。そこで、地域まちづくりという現場と、子ども達の地域の居場所づくりが、うまくキャッチボールしながら、子ども達自身の社会参画が進むという、そういう社会になるといいという考えから、この事業ははじまりました。

この事業は協議会という形で進めています。「**かながわの地域社会参画推進会議**」という体制を取りながら、その中でこの事業そのものを動かしていこうとしています。ミニシティプラスは事務局をさせていただいております。

推進会議のみなさま、お立ちいただけますでしょうか。今日は後でコメントいただきますけれども、**NPO 法人シャーロックホームズ**、**リスト株式会社**、**NPO 法人横浜プランナーズネットワーク**、**アクションポート横浜**、それから **NPO 法人夢キューブ**、**スマイルミニシティ・プロジェクト**、そして**神奈川県県民局次世代育成部青少年課**のみなさまです。ありがとうございます。子どもの健全育成とか教育プログラムをやっていたり、まちづくりという中間支援をやったり、現場を行っていたりという、普段はあまり同じ土俵に上がらない、ちょっとテーマを行き来するような体制でこの事業を始めたのが、実は 23 年度からになります。23 年度から 24 年度は新しい公共という事業で動き出しました。25 年度は自主資金でやっていたんですが、26 年度から神奈川県基金 21 の方に採択されて、県の協働事業で、進んでおります。県の次世代育成部青少年課さんと新しい公共から協働してきたのですが、それ以外に、例えば子ども達で広報をすることで、教育局の方々だったり、あるいはまちづくりの現場、子ども達の派遣先を、多角的に広げていくために、商業流通課さん、都市整備課さんに、県の方からも入っていただいて、推進しています。

では、特命子ども地域アクター事業についてですが、子ども達がまちづくりの団体にそれぞれ派遣されている様子を今日、お話させていただきたいと思います。その前段階として、初めて会う子ども同士のアイスブレイク、まちづくり団体とのお見合い会、まちづくりに行く時に何を注意しなきゃいけないのか、どんなことを見てくるのか、というようなことも、まちづくりのいろは講座というような形で、大学が支援しながら、ちょっと勉強してか

ら派遣する、というプログラムになっております。

26年度は、1年目アクター募集30名が目標でしたが、昨年は残念ながら26名でした。今年は39名と大幅に増えております。今年は小学校6年生の子が8名いまして、これから中学生になっていくので、ますます楽しみです。一方で実は高校生だった子が大学生になって、今日も手伝ってくれています。こういう事業にそのまま継続してなんらか関わっていき、大学でもそういう筋の勉強の方にいったりとか、そういう動きが継続していくことを子ども達自身の次のキャリアアップにもなっていくのではないかと期待しています。

私たちは横浜市を活動の中心にしていたんですが、県との協働で、いろいろな課の方にもご協力いただきながら、広くいろいろなところに派遣をされています。小田原だったり三浦の方だったり、かなりあちこちに行くようになってきております。

こういうことを推進するためにはやはり事業の経費が必要なんですけど、これに関しては今は神奈川の基金21の方を活用させていただいておりますが、助成金が終わったあとも自己資金、つまりファンドを立ち上げ、その中で継続していくような仕組みを出来ないかと県とも相談しながら進めています。

具体的には子ども達が提案した事業に、子ども達自身に資金を提供、補助金を出すような、そういう仕組みにならないかということを考えています。子ども達を支援する団体に補助するのではなく、子ども達自身を応援する仕組みづくりをしたいと、いま試行錯誤をしている段階です。

まずはその最初の試みとして、「かながわ生き活市民基金エラベル」というものにエントリーしまして、寄付を集めるということら挑戦しようとしております。具体的にいうと、公益財団法人の仕組みを使いながら、まずは40万目標で、子ども達自身の事業として、子ども達自身に渡せるように動かしていくことと、子ども達をまちづくりに派遣するコーディネート費用にしていきたいと思っています。これは、たとえば1万円寄付しますと、4千円の税控除が受けられる仕組みになっております。今日実はみなさまに寄付のお申し込みの内容の物を入れさせていただいております。少額でも結構ですので、ぜひご協力ご支援をいただければと思います。

以上、私の方から事業の説明と資金のお願いの方をさせていただきました。ありがとうございます。

岩室：ありがとうございます。寄付は100円からでもできますので、ぜひよろしく願いいたします。

それではここから、団体の紹介と今回の活動の報告に入ります。8月から12月まで、いろんなところで事業を行ったんですけど、事業実施順で報告をお願いします。

まずは横浜コミュニティデザイン・ラボの五十嵐さん、お願いします。

● 発想はとてもよかったが現実には難しかった

NPO法人横浜コミュニティデザイン・ラボ

五十嵐：はい、五十嵐です。よろしく申し上げます。我々は横浜コミュニティデザイン・ラボというNPO法人で、関内、ここからですと歩いて5分ぐらいの相生町3丁目というところで「さくらWORKS 関内」というスペースを運営しつつ、横浜経済新聞と港北経済新聞というwebの媒体、webの新聞を出している団体です。

岩室：横浜のコミュニティをデザインされているんですよね。

五十嵐：はい。

岩室：今回はどんなイベントをアクターにお願いしたんでしょうか。

五十嵐：はい、8月1日に、大棧橋で「海の青と都市の緑を守るフェア」というイベントをやったんですが、これは環境について考えるということで、時期的にも夏休みということで、非常にお子さん連れの方が多くいらっしゃる。環境とかエコについて考えるというイベントです。

岩室：そのイベントに、夏休みで子ども達もたくさん来るだろうから、訪れた子ども達がこのイベントで何かを得ていけるようなことを考えてくれないか、ということで打ち合わせをしました。その中で一つは自由研究のサポートコーナー。ワークショップに参加したり、取材活動を書き込むシートをつくり、記念写真をとると、その場ですぐに夏の自由研究の宿題が完成となるという、子どもがためのシートを百崎くんにつくってもらいました。百ちゃんに一言！宿題をした人って何人くらいいたんですか。

百崎：当初では100人を見込んでいたんですけど、残念ながら、この場で宿題が完成したのは20人ぐらいでした。大量に印刷した紙が、余ってしまったのが、残念でした。

岩室：それは何でしょう？

百崎：大棧橋まで子どもが足を運ぶっていうのが、難しかったのかな。あとは、この自由研究の企画が、アクター側でちゃんと説明できなかったのかなっていうのがあります。

岩室：わかりました、ありがとうございます。

岩室：あと、せっかく遠い山北から参加したので、その山北町の名物を売ってもいいかっていう話になったんですね。

五十嵐：はい、最初は我々としてはイベントの広報をお願いできれば、と思ったんですが、打ち合わせしていると、その自由研究の話とか、物産コーナーの話とかが出てきて、そういう発想もあるんだなあと思って、逆に感心したことを思い出します。

岩室：じゃあ、山北の方、誰かひとり喋ってくれますか。

茂川：もがわかるみです。物を売る大変さがとてもよくわかりました。

岩室：大変さってこと？売るの大変でしたか？

茂川：はい

岩室：百ちゃん、最後にもう一言どうぞ。

百崎：イベントのテーマに合わないようなブースがあったのはなんでかなってちょっと思いました。

五十嵐：ずいぶん厳しい、痛いところつくな～。いろいろね、本当は環境がテーマ。なかには、テーマとはずれちゃうのもあったんですけど、それはまあ今までの当然付き合いがあったりとか、どうしても出たいところがあったりとか。

岩室：大人の事情？

五十嵐：大人の事情でね。

岩室：テーマが、子ども達にはどうもわかりづらかったようです。海とか山とか環境って言われても、ふわっとしていて、つかみどころがない。もう少しなんかテーマを絞ったキャッチーなものがあると、もっと取り組むやすかったのかなっていう話が、後でアクターの間で出ていました。

五十嵐：なるほどね、はい、わかりました。

岩室：ありがとうございます。横浜コミュニティデザイン・ラボでした。

では次はフォーラムアソシエですね。元木さん、よろしくお願いします。

● 小さな「子どものまち」で「自由な発想でまちをつくる」と、大人にも気づきを

フォーラムアソシエ

元木：こんにちは。フォーラムアソシエの運営委員長の元木と申します。生活クラブという生協から生まれた団体で、地域で活動していきたい人を生み出したり、グループを応援したりという団体です。今回、特命子ども地域アクターさんをお願いしたのは、ここ数年、子育てと、農ある暮らしをテーマに活動しているんですけども、夏休みに子育て支援で、居場所事業をやってみようと考えました。いろいろなワークショップを5日間行ったんですけど、子どものまちを作って、そこを子どもで運営して子どもで楽しむっていうことをやってみたいと思いました。最後の2日間の、段ボールでおうちを作るお手伝いと、それから最終日にその段ボールハウスを並べて、まち並みを作り、まちで遊ぶっていうことの中身を、子どもにとって、面白いことにしてほしいという願いをしました。

岩室：ありがとうございます。やることはおおよそ決まっていたんですけども、中身がもうあと一つというところで、アクター依頼があったんですよ。チラシに書いてある「面白い大人がいます」というのはどういう意味でしょうか。

元木：子どもにとっては、やっぱり大人ってなんか変な人でありたいなとか、異質なものでありたいなっていうこと。それからワークショップの講師の方たちも結構変わった大人たちをお呼びできたので、それでそういう風に書きました。

岩室：そうだったんですね。これに参加した州濱くん、しゃべってもらっていいかな。州濱くんはお金を作ったんだよね、

州濱：はい。お金単位はオルタです。一番小さい単位が1万オルタ

岩室：一番小さいお金の単位が一万オルタだったんで、それより細かいお金がなくて、もう大変。何を買うにも一万オルタ札しかなく、おつりがない。そのお金を造幣局がどのくらい刷ったのか知らないけど、まちが生まれて1時間ぐらいしたらお金が銀行から消えちゃったんだよね。アルバイトした子どもが来て、お金下さいって言っても、銀行からなくなってしまった。

そうそう、州濱くんは銀行をやっていたんだけど、銀行はもうひとつお店を兼ねてたんだよね。それはどんなお店だったの？

州濱：射的屋です。

岩室：洲濱くんのお店は、看板に「射的屋・銀行」って書いてあって、非常にわかりにくいんですけど（笑）。銀行にお金がなくなって、どうなったんだっけ？

州濱：税金を徴収しようって。

岩室：税金を徴収しようってことになったら、反対者が出て、方針が決まらないので、突如、市長選が行われたんだよね。それがこの様子です。州濱くんも立候補しています。それで洲濱くん、勝ったんだっけ、負けたんだっけ？

州濱：負けましたね。

岩室：対抗馬の女の子が、税金制度はつくるけど、「もし税金を払えない人は、私が全員肩代わりします」って宣言したので、たぶん勝てたんだと思うんですけど。そしたら彼女は市長

当選後に一文無しになってしまい、募金箱を持ってまちを歩いた。わずか5時間ぐらいのまちだったんですけど、波乱万丈なまちになりました。小さなスペースなんですけど、1日のうちに郵便局ができて、そして「すべての連絡網を郵便局を通してください」って宣言されてしまったので、すみません〜って言えば近くで声が通じるぐらいの規模のまちなのに、全部郵便局から連絡を出しました。

元木：今日、郵便局さんが来ているんです。

岩室：あっ、ほんと？ 突然郵便局が出来て、すべての連絡、郵便局を通すことになって。結構もうかったんじゃないかなと思ったんですけど。楽しいですね。

元木：どんどん子どもが勝手に起業してくのが面白くて、オルタ紙幣という通貨の紙は作ったんですけど、お財布がなかったので、お財布屋さんが登場したりとか、魚釣りのコーナーがあったんですけど、そしたら今度焼き魚屋さんが現れたりとか。

岩室：そうですね。そういうことが、やっぱり大人が考えているとすぐにポンポン出てなくて、遠慮しちゃう部分があったと思うんだけど、今回やっぱり、子ども達がスタッフに入っていることで、あー、起業してもいいかなとか、こんなことやりたいなとか、どんどん出来ていって、非常に面白いまちになったと思ってます。次回から一緒に最初から運営をやってくれる子たちがでるといいですね。でも州濱くんの家、オルタから何分だっけ？

州濱：数分かと。

岩室：数分だよ。来年から、もう運営やってね。

州濱：えっ。

岩室：お願いします。だって、近所の人がやるのが一番いいですよ。

元木：そうですね。あと山田くんにも前日すごく頑張ってモデルルームを作っていたいただいて、すごく助かりました。

岩室：そうですね。子どもたちもたくさん来てくれて、本当に楽しかったです。ありがとうございます。

次は移動サービス協議会の山野上さん、お願いします。今回は地図作りをしたっていうことで依頼があったんですよ。

● 飛んで行く発想が大人にとってフレッシュ

横浜移動サービス協議会

山野上：こんにちは、移動サービス協議会の山野上です。

田所：田所です。

山野上：この活動のメインになっている田所くんです。私たち横浜移動サービス協議会は、障がい一人で外出するのが大変な方たちの支援をしているネットワークです。その中で、外出する時に使う、福祉車両でおじいちゃん、おばあちゃんたちが車椅子のまんま、車に乗って出かけたりするのを見たことあるかと思います。そういう車の送迎や、一緒に、電車やバスに付き添って、障がいのある人達と歩いてお出かけにいたりしているんですけど、そういった情報を1冊にまとめて、本を発行する事業をしています。その中で、移動の手段だけじゃなくて、こんなところ行ったら楽しいよっていうのを紹介したくて、田所くんたちと一緒にまちの紹介をしているところなんです。そこにぜひ子ども達のフレッシュな視線を入れて、もっと楽しいものを作りたいなと思って今回、協力をお願いしました。

岩室：まだ全然作るまでには至りませんでしたね。取材をどこにしようかって話をしている

と、どんどん膨らんじゃって。お祭りもいいねとか、飲食店もあった方がいいとか、で。いくつかアクターも一緒に下見に行ったんですけど、都筑民家園だったり、優しい方がいて入りやすいレストランとか、障がい者の方でも入れるように工夫をされている音楽サロンなど。山野上：そうですね。私たちはいろんなところのバリアの調査をしてきているんですけど、「ここにバリアがあるね」っていうとこまでやっていたんですが、今回、アクターのみなさんと一緒に歩いてみたら、「あっ、この段差は板を渡せば通れるんじゃない？」とか、民家園行った時にも、古墳の周りには溝掘ってありますよね、水が入らないように。そのところも、「あっ、もう車椅子は入れないね、バリアだね」って言って終わっちゃったところが、子ども達の場合は、「ここは渡り板を渡せばいいんだよね、じゃあ作ろうか、どうやって作ろうか」って、そんな発想に飛んでいく。それがとても私たちにとってはフレッシュでした。

岩室：ありがとうございます。今日、残念ながらそのときのアクターがお休みしちゃっているんですけども、彼はトンテンカンテン作りたい、学校の先生に道具を借りれば、作れるかもしれないからってことで、作る気満々なんです。民家園と話したら、何かそういう対策取れて、一緒に作ればやれるよと言ってくれたので、次につながっていければなって思っています。ありがとうございます。一緒に歩いてくれた加治さん、一緒に歩いた時、思ったことがあったら教えてくれる？今まで車いすの人と一緒に歩いたことはあった？

加治：はい、ありました。

岩室：それはどういう時ですか。

加治：買い物した時なんですけど。

岩室：じゃあ、そういう経験はあったのね、もともと。

加治：少しだけありました。

岩室：今回一緒に歩いてみて、なんか特に自分が普通に歩いた時と、一緒に歩いた時で気になったことはありますか？段差が多くなってとも言ってるんだけど、他になんかある？

加治：車椅子じゃない場合は、普通に通れるような場所も、車椅子だと狭く感じたり、結構不自由だなって思いました。

岩室：せっかく途中までやったので、もし来年も続けていって、できるといいですよ。

山野上：そうなんです。実は今その前に中区版を作っていて、そっちが佳境に入っちゃったので、ちょっとお休みしてたんですけど、ぜひ続けてやっていきたい。彼自身（田所さん）は下見をしているので、今度一緒に行けそうなところを選んで、また声をかけますので、ぜひ協力して下さい。

岩室：ありがとうございました。田所さんも、ありがとうございます。田所さんは、ミニシティのイベントにもよくきてくれます。ミニシティプラスで防災キャンプをやったんですが、その時にも来て下さいました。一緒にこれからも何かできたらいいなと思っています。それでは、ホットシェフですね、次。ホットシェフ。動画、途中まで見ますか。

・商店街の「変わった大人」と子どもたちが出会って生まれた楽しい企画

ホットシェフ

(動画：相模大野銀座プロモーションビデオ)

岩室：実はこのプロモーションビデオは、さっき最初に司会してくれた百崎くんが、少ない

素材で苦労してやってくれました。録音はここのお店の中で一旦、ライブで録ったものを、私が（音楽の仕ことをしてまして）自宅に持ち帰り、子ども達の声をさらに入れて、それで完成させました。県の鈴木さんに説明してもらいます。

鈴木：県で商店街の担当をしている、鈴木と申します。宜しくお願いします。神奈川県内に千以上ぐらい商店街がありますけれども、9割以上、ほとんどが困っている、足りないものだらけの商店街なんです。だけれどもだめじゃない、ということで、今は、使えるものはじいさんでも、ばあさんでも、ペットでもみんな使っちゃえ！ということで、足りないものを補いながらやっていくということを進めてるんですが、まさにこの「子ども達の力を借りて、商店街、もう一度元気になろうよ」ということは、本当に渡りに船ということで、我々にとっても非常にありがたいことなんですね。

去年からまさに足りないものだらけの商店街を、いくつか選んで、子ども達に来て活躍していただくということを行っています。このホットシェフは相模大野というところがJAZZでまちおこしをしたいということを行い始めたんですけども、まあなかなかですね、東京でJAZZ、横浜でJAZZやると人が来るけど、相模大野でやったって人が来ないわけですね。そういう場合にどうやって東京、横浜と差をつけていくか。じゃあ普段着のJAZZにしよう、東京よりも横浜よりもお客さんを温かく迎える、そういう活動をしていこうということになり、一番温かく迎えられるのは、自分たちで演奏して、お迎えすることじゃないかということで。飲食店主の人たちが、自分たちの道具でもある鍋、釜かなんか叩いて、演奏するという活動をはじめた。それがホットシェフです。イベントの前に、相模大野の駅等で歌って踊って「今度こういうイベントやりますんで来てね」というようなPRをやっています。今回はそのプロモーションビデオをアクターに作っていただいた。完成しまして、飲食店主の人たちも非常に喜びました。

県の方としては、この活動の意味はやっぱり、いろんな大人の人と子ども達が出会う、特に商店街の人っていうのは非常に変わった人がいるわけで、相模大野商店街の中にも、本格的なダンサーのお好み焼屋とかですね、カラオケ大会荒しのイタリアレストラン店主とか、いろいろいますんで、そういう人たちと一緒に子ども達が出会い、やっていただけるといいなと思います。

岩室：ありがとうございます。最初はアクターも一緒に演奏して、なんか出ればいいねって言ってたんですけど、子ども達と話してて、それだけじゃ面白くないからビデオ作っちゃったらどうかなんていう話が出て。私もここまでちゃんと完成するとは思わなかったんですけど。

ちょっとじゃあ出演した人に、一言話してもらえますか。じゃあ、目が合っちゃったんで福永くん。突然、参加することになったんだよね。どうでしたか、参加してみて。

福永：キウですね、この企画は1回しか行けなかったんですけど、まさかの採用という。

岩室：踊りは得意なの？

福永：全然やったことなく、超初心者だったんですけど、2、3回見たらできるようになりました。

岩室：あー、そうなんだ。じゃあ、ひなちゃんも？ ダンス上手だよ。どうでしたか？

市川：意外と簡単な踊りだったから、すぐにみんな覚えられたと思います。

岩室：楽しそうだよ。ぴったりは合っていないんだけど、楽しそうな感じは出てますよね。 Facebookに上げたところ、みんなが楽しそうだったという声がいっぱい聞かれたので、

こういうのも面白いかなとほんと思いました。

鈴木：商店街はまだ頑張ってるよ、元気だよ、っていうのが伝わるといいかなと思います。

岩室：これ、Youtube でどんどんダウンロード回数が増えたんだよね。サポート数も。

鈴木：それが普通じゃないですか。

岩室：編集してくれた百崎くんにも拍手。百崎くんも本当にいろいろ得意なことが多くて、ほんと付き合い長いんですけど、今回も大活躍してもらいました。

では、次は横浜都筑文化プロジェクト。すみません、これ私も入ってる一緒のグループなので、私も時々話しますが、江幡さんお願いします。

● アンケートを今後活かしていきたい

横浜都筑文化プロジェクト

江幡：横浜都筑文化プロジェクトは、港よこはまの横浜のその奥の方にある、丘の横浜も横浜じゃないか、港よこはまの文化とは違う文化が横浜北部にはあるのではないかと、それをもっと発信しようということで、去年から始まった活動です。アクターのみなさんには去年も参加していただいて、去年は横浜北部4区の文化施設を訪ねて歩いて、それをマップに起こすということをやりました。区役所の区民活動センターの壁面にそのマップがずっと展示されています。横浜北部4つの区を、大きな白地図をジグソーパズルのように合わせた大きな地図にしてあります。今年はその北部に、アートがたくさんあるじゃないかっていうことで、アートを切り口に訪ねて歩くことをしました。

岩室：このグループは結構年齢高いんですよ。これからの文化担っていく若者が一緒に参加しないと、おじさん、お婆さんばかりじゃ、偏るんじゃないかということで、子どもの視点で参加してもらって、レポートしてもらってということにしたんですけど、そこから本当は去年作った地図を、さらにもうちょっと充実させるようなところまでいきたかったんですけど、今回ちょっとそこまでいけなくて、時間切れ。大人の方の準備不足もあって、皆さんの力が最大限活かせなかったなというのは残念だと思いますね。

江幡：ツアーのアンケートを取ってくれましたよね。その結果を、たぶん今後すごく活かしていけると思うんですけど。

岩室：ありがとうございました。それでは次、鋼管通商栄会なんですけれども、これはミニシティプラスの杉山の方から話していただきます。

・地元の中学生を「商店街企画委員」として巻き込んでいっしょに企画実施

鋼管通商栄会

杉山：ミニシティプラスの杉山です。鋼管通は、実はアクター2年目の参加です。物々交換イベントを今年もやりました。(昨年度つくった商店街のテーマの音楽流れる)

こういう音楽を流しながら、商店街で物々交換のイベントをするんですけども、2年目だからちょっと趣向を変えようということで、おぼけカフェもしました。

今年は、地元の子と一緒にやりましょうってことを商店街にお話ししましたら、地元の臨港中学校の職業体験を夏休みにやるというのに合わせてやりました。商店街の人と一緒に、中学校の説明会に行って、「職業体験で商店街の企画委員をやりませんか」と募集したら、4人の中学生が、商店街企画委員として参加して活躍してくれました。アクターと一緒にいろいろな地域に行くんですが、その後続いていくためには、その地域の子ども達と一緒に関わ

ってくれて、つないでいき、関わってもらいたいなという風に思っています。そんな事例が、今回できたかなと思っています。

岩室：臨港中学の子に電話でインタビューしたんですけれども、実は鋼管通りっていうのはバス停の名前にもなっているし、通りの大きな名前なんですけど、そこに商店街があることさえ知らなかったって言うんですね。お店の前は通ったけど、あつたぐらいで、気にもしてなかったっていうんです。ところが今回一緒に関わって、入りにくそうだった自転車屋さんや酒屋さん、ジュースを売ってるお店の人と話してみたら、大人の方がものすごく優しくって、「こんな優しい大人の人たちがまちにいたんだ」と思ったらしいんです。

商店街の人達が「手伝ってくれてありがとう」って言って、お弁当出してくれて、一緒になってやってくれることが、本当に自分にはいい経験になったし、イベントに行った時に、いつもイベントやってるな、ぐらいい見てたんだけど、裏方の準備のすごい大変さがよくわかった。その後イベントをやってるのを見ると、きっとこんな準備があつたんだろうなって想像するようになった。来年はアクターに応募したい、と言ってきているので、臨港中学からもアクターに参加してくれるかなと思います。

鈴木さん、ここは、こんな人が集まることってある商店街だったんですか？すごい人ですよ。

鈴木：そうですね。商店街の人もたくさんの方が集まり、びっくりした。アクターがはいつてくれて、8年振りにイベントができたんです。

岩室：何年もアクターを続けてやっている直枝くんと別の活動で一緒に高知に行った時に、夜遅く、一緒にホテルの一室であーだ、こーだって企画を一緒に考えて、直枝くんが一生懸命プレゼンのパワーポイントを作ってくれました。最初の企画から、ここまで成功して、直枝くん、どうですか？

直枝：前年度は写真右下にある、物々交換所のイベントをやったってとこまでだったんですけど、今年度は、おばけカフェもつくりました。今年は夏祭り、縁日みたいな物をイメージして行いました。あまりお天気良くなかったんですけど、たくさんの方が来てくれてすごく嬉しかったです。

岩室：そうだよ。今回は子ども神輿も作ったんだよね。いいんだけどさ、よく見たら御神輿の台が、“われもの注意”を貼ったままの発砲スチールじゃないの？もうちょっとデザインきれいにしてほしかったな。その辺の細かい詰めが甘いんだよね～。次回はビジュアル的なところも大事にね。

鈴木：詰めが甘いかもしれないけど、ちゃんと間に合わせるってところはすごいですよ、アクターのみなさん。神輿をその時間までに作るっていう。

岩室：短い時間で神輿を作り上げてくる力。そうですね。ありがとうございます。直枝くんも大活躍なんだけど、まだ、中三だよ。どうするの？来年の鋼管通は？

直枝：出来る限り関わっていきたいと思います。

岩室：本当に？ ありがとうございます。

それでは、次は三浦ですね。三浦の内藤さん、よろしくお願いします。

● マグロだけではない歴史あるまちの魅力を「海賊」が楽しく伝える

三浦海業公社

岩室：三浦は2回目なんですけども、こちらの海業公社さんのチャッキラコの方には初めておじゃましました。今回はどのような主旨のイベント、っていうことだったんでしょうか。
内藤：三浦海業公社の内藤と申します。海業公社というだけあって、海に関わるものの応援をする会社です。今回は、まぐろで賑わっていた町が、まぐろ船が入らなく、少なくなってきたことで、ちょっと下町の元気がなくなってきました。それを子ども達の力を借りて、なんとか元気を取り戻せたらいいなと思って、親子でのウォークラリーを企画していただきました。

岩室：今回は海側ではなくて、まち側の看板建築を探すラリー。目線を上にして歩いてもらおう、みたいなことなんですよ。

内藤：そうですね、下町には、昔ながらの面白い看板があるので、それを見つけていただくということですね。

岩室：アクターがこと前に下見をして、どの看板を見つけてもらおうとか、ウォークラリー、どこ歩こうというのを、地元の方である、内藤さんやチャッキラコのボランティアの方たちに案内してもらって、めぐるポイントの地図を作りました。これを作成したのは大人のスタッフなんですけれども、場所を決めて、ここにするっていうのを一緒に考えたんですね。この中で、ひとつひとつのポイントの案内、町中に勝手にシール貼るわけにも、矢印書くわけにもいかないので、まち中にそれぞれ海賊の格好をしたアクターが立っていて、道の案内するとか、迷った人に看板そこだよって教えてあげられるような風にしようということで、みんな海賊と....。

内藤：チャッキラコの衣装ですね。

内藤：本当は七五三の七歳の子が着る、うちの娘の衣装を貸しました。

岩室：ですよ。これを着たゆきりさん、何歳だっけ？

内藤：十七。

岩室：十七歳だよ。井藤ゆきりさんに着てもらったんだけど、着心地どうでしたか？なんか、あのTwitterかFacebookで上げたら、友たちに。どうしたのっていわれたんだって？

内藤：七五三の服を、どうして十七歳が着れるのって言われました。

岩室：でもぴったりじゃないですか、ちょっと短いけど。

内藤：おはしより下したりとか、肩を出したりとか、全部下して、それでなんとかやりました。

岩室：やってくれたんですね。すごくいい感じで、きれいな色の着物だよ。田島はるなちゃんも着たと思うけど、どうでしたか？着てみて。

田島：下駄を履いたんですけど、すごく歩くのが辛くて、親指とかが痛くなって。着物は少しずれてきたりした時に、通りかかった人たちに直してもらったりしました。

岩室：通りかかった人が直してくれたの？全然知らなかった。そんなことがあったんですか。

岩室：朝、かなり並んでました。

内藤：目標は50組100名だったんですけど、最後集計して、だいたい70名ちょっと。

岩室：70名ぐらい。目標よりはちょっと少なかったけど、でも。

内藤：でも、10時に受け付け開始だったんですけども、その前から結構並んでいてくれて、嬉しかったです。

岩室：そうですね。実はここ1軒屋の空き家、空き家っていうか貸家を1日だけ借りて、前日から泊まって、準備して朝早くもう一回町を歩いておさらいしてから始めたんですけど

も、朝は静かで人の通りが全然なくて、どうなるのかと思ったら、開始の10時には結構人がいて。楽しく出来て良かったかなと思いますけど。

まちなかにいる海賊の中に、キャプテンジャックになってくれた元アクター、黒山くんがいます。去年までアクターだったんですけど、今年大学生になって、お手伝いをしている人がきています。黒山くん、ごめん、怒られちゃったんだよね。私が悪かったんですけど。そのこと話して。

黒山：はい、怒られました。このおぼけ階段と呼ばれる、階段の上が実はお寺になっていて、ちょうどこのイベントをやった日に、法ことがやられていて、お話をしていなかったので、海賊の格好で、中に子ども達を連れて入って行ってしまったので、ちょっとお寺の方が「何があるのかわからないから、先に言ってほしかったわ」っていう風に、私に言われてしまっ

て、ちょっとどうも。
岩室：ほんと申し訳なかった。イベントのことばかり考えてて、まちの人の都合っていうか、本当にそういう法ことあることとか考えずに、次回から気をつけたいと思います。

黒山：町の方もちょっと何をやってるのかっていうのを、みなさんご存じじゃなかったの

で、この格好で、いきなり何やってんの？みたいな方が。ハロウィンと間違えられてしまって、時期的にもちょっと違ったんですけど、早いよね、なんて言われて。できれば根回しをしていただければ。よろしくお願いします。

岩室：本当に申し訳ないです。ありがとうございます。
内藤：通常、いつもイベントであそこを通過して案内するので、まさかそんな風に言われると

思ってたんです。
岩室：そうですね。まちの人とはツーカーの仲だって聞いていたので、ちょっと甘く見て

ました。海賊は合わないですね。お寺にはちょっと。ちょっとびっくりされてしまったの

かな、と思うんですけど。次回からは、事前に言ってくれば、もちろんいいよって

いただきました。
この時に、通りがかりの子ども達が、まだ小学校4年とか5年生ぐらいなんですけれども子どもたちがスタッフをしているのをみて、「海賊やってるの？来年もやるなら海賊やりたい」という子どもが結構いました。だったら名前書いてよって言ったら、10人ぐらい書いてくれちゃったんですね。もし時期になって、来年もやることになったら、お手紙書きたい

・当初目的を達成した以上に思わぬ展開に発展して大成果

中川西地区センター

赤木：こんにちは。中川西地区センターの赤木と申します。地区センター、もうよく御存じだと思

えるかを、アクターに投げかけました。ちょうどハロウィンっていう時期もあったので、夜、ハロウィンってことになると、やはりおばけ屋敷。子ども達が面白いことをいっぱい考えて、おばけ屋敷をやりました。

岩室：地区センターの2階全部を使うってことだったんで、三部屋、三つ舞台がありました。こちらは心霊写真館。実はゴム手袋で膨らませたものの他に、人の手があるんですよ。スタッフの方？でしょうか。もっと動き出してくれないと、どれが人の手だかわかんないなっていう。

赤木：そうなんですよね、ちょっと残念でしたよね。でも子ども達、かなり怖がっていて。座るだけで何かされるんじゃないかっていうので、相当怖がってましたから、あんまり脅かしすぎるのもっていうので、ちょっと控えちゃったんです。

岩室：なるほどね。次の部屋のおばけ屋敷の写真がなかなか暗くて撮れてません。おばけ屋敷のスタッフはあまりの盛況さに、「ブラックバイト」なんて言われたんですよ。おばけ屋敷だと、一回全部、服とか着替えないとトイレも行けないんですよ。みんな。お化けのまま出るとばれちゃうから。それで、全員が揃って着替えて、今からトイレ休憩！って行かなきゃいけない。見ての通り、ものすごい人がきて並んでいるので、さばききれなくて、やすめない。ところで、この満員状態大丈夫なんですか？消防法的に。

赤木：そのことは触れないで下さい。会場（笑）

岩室：ものすごい人が来ちゃって。もうなんか予定してた人数は、

赤木：はるかに超えましたね。悪魔カフェで出したケーキですが、100用意したんですけどね、全然足りなくて。

岩室：全然足りなくて。悪魔カフェでは、実は水の中に入れると光るキューブのジュースとおばけの顔の書かれているケーキを出しました。実際何人ぐらいでしたか？

赤木：158人の子どもと、それに付きそいの大人が来てるから、ゆうに200は超えてる。

岩室：階段の下までずっと並んじゃってるので、おばけ屋敷もほんと少数で入れたかったんですけど、さばききれないから、7,8人入れるじゃないですか。人数が多くなるとみんな強気になって、お化けに向かって戦ってきたりして、おばけ役がほんともうきつくて、大変だったと思うんですよ。おばけやった人、一言、言ってもらえますかね。州濱くん、ダースベーターだったんだよね。ダースベーター、怖がってた？みんな。

州濱：面白がってた。

岩室：でも頑張ってたよ、すごくて。じゃあ草郷さんは？どうでした？

草郷：楽しかったんですけど、叩かれたり、目の前におセットを普通に壊して、笑って出ていく人がいました。

岩室：でもね、笑ってる様子がね、単に笑ってるんじゃないで、怖くて笑ってる感じだったのね。本当に外に号泣して泣いてる人や、しゃがんで立てなくなる子とかいて、相当怖かったんじゃないかな。

赤木：怖かったみたいですね。

岩室：まず入り口で、へびとかが絡まってる中からお守りみたいなお札を取らなきゃいけないんですよ。そこに寺子屋って赤で書いてあるんだけど、結構達筆で読めないんですよ。要は「寺子屋」の周知が目的なので。奥に進むとこわい映像の中にやっと文字が出てきて、「寺子屋」ってわかる。呪文がわかった方は次にお進みくださいとか言われて行くと、ダースベーターとか、その先に囚われの身になったお姫様が、クモの巣みたいところに囚われてる。

さらに大人の杉山さんが、「俺のお札を返せ、俺のお札を返せ」って言って襲い掛かってくるので、ギャーって逃げて、それでやっとの思いでお札を所定の場所にやると杉山さんの動きが止まる。だけど、その時点でもう怖いみたいで号泣。

しょうがないから入り口で、「おばけ少なめですか？多めですか？」って聞いて、「おばけ少な目」って言われたら、そしたらちょっと抑え目に「おばけ、多め」って言われたら、大袈裟に動く状態でしたね。でも「寺子屋」の名前は周知されて、そのあとのイベントの募集が、多かったそうですね。

赤木：そうなんです。寺子屋は1月から本格始動なんですけど、その前の放課後クッキングっていう、夜にまずお料理からやってみようってことで始めたんですが、応募がずいぶん多かったですね。

岩室：じゃあ寺子屋、もう中川西地区センターといえば寺子屋っていうように。

赤木：寺子屋って。でも子ども達、たぶんね、混乱してると思うんですよ。寺子屋っておばけ屋敷なんだろうと。

岩室：ちょっと、まずかったかな。今回はおばけ屋敷が多くてですね、アクター15活動のうち5もおばけ屋敷っていう状態だったんです。どうしてこんなに子どもっておばけ屋敷が好きなんですかね。

赤木：ちょっと思いもよらなかったことに発展していったのが、すごく楽しかったですね。寺子屋も大人が考えると寺子屋はまじめな話になっていくんでしょうけどね。

岩室：ありがとうございました。

それではNPO法人夢キューブですね。商店街のプロモーションPVを作ったので、ちょっと最初は見てみましょう。

・地域のイベントに参加して地域資源にこだわりながら大学生スタッフも大活躍

NPO 法人夢キューブ

(PV)

岩室：(ビデオの) レポートとっても上手でしたね。じゃあ山北町のイベントの話を紹介していただけますか。

高橋：NPO 法人夢キューブの高橋です。このイベントに参加してくれたアクターのみなさん、本当にありがとうございます。夢キューブ自体は、1市5町といいまして、神奈川県西部に位置するところで活動しています。住みたいまちづくり、魅力づくり、というところに貢献して、取り組んでいる団体です。お膝元である山北町でもう6、7年になるんですけども、商店街のイベントを年2回ほど行っています。そして、定着しているイベントの中でも子ども達が、特命を受けて来てくれるという活動に商工会のみなさん、そして町のみなさんが感動しました。教育委員会からもご理解を得て、まちの子ども達を呼べて、子ども達自身もリーダーとなって活動できるように、時間をかけて準備し、イベントを行いました。

岩室：去年はおばけ屋敷が怖くて、すごく好評だったので、今年もおばけ屋敷って話も出たんですけど、同じことを2回続けてやるのもやだっという子どもの意見もあり、今回はカフェになりましたね。

高橋：そうですね。

岩室：魔女っこカフェっていうのを、山北町のアクターが考えてくれました。

高橋：そうですね。魔女っこカフェっていうのも、商店街の店主さんが子ども達をカフェに

呼びたいという気持ちもあり、カフェをしてほしいというお願いがあつて。

岩室：商店街にカフェはあるんですか？

高橋：ないんですね。

岩室：ないんですね。だからカフェがあるといいなっていうのは、子ども達にもあったんですね。この日は充分カフェを楽しんでいただいたと思います。一応ハロウィンなので仮装のコンテストも行いました。

高橋：そうですね。

岩室：私は、この日行けなかったので、子ども達に聞いたら「イベントが盛りだくさん過ぎだよ」と。「誰がどこ、何をやればいいんだ？」と、忙しすぎたって言って反省してました。

高橋：商店街自体が、なんでも効く御利益があると言われる観音様が鎮座されたお祝いで、1年を迎えたお祝いというのも兼ねていました。今回立派な御利益のある僧侶が来てくれて、盛り上がりました。

僧侶の格好に着替えた黒山くん登場。

岩室：僧侶？ありがとうございます。なんかアクター卒業して大学生になったら、スタッフとしてこんなことまでやらされちゃってね。でもこの頭（坊主頭）だったらやるしかないでしょ。それで、ここでも、やってたらいろんなことが起こったんだっけ。

黒山：観音様の前でこの格好をしていたら、なんとなくわかるかと思うんですが、ご年配の方はハロウィンとかあまりご存じないので、本当の僧侶かと思われた方がお二方おられました、「本物ですか」という風に言われて、あっ、違いますっていうやりとりが。子ども達に飴玉をあげるために、お椀みたいなものを持っていたら、それこそ托鉢しているお坊さんに似ていたようで、お金を差しだしてきたおばあさんがいて、ちょっとどうしていいかわからない。やめて下さいみたいな、リアクション取ってしまったんですけど。それだけリアルに出来たということ、肯定的にとらえております。

岩室：黒山くんは、この日はどういう名前が出ていたんだっけ。

黒山：**ダライ・ヤマ**

岩室：ダライ・ヤマっていう名前前で仮装コンテストにも出てたんですね？ 見ると、4票しか入ってないじゃん。人気が・・・。

黒山：自分で1票入れてますからね。3票入れて下さった方がおられる。感謝です。

岩室：夕市会場のはずれの体育館でさっきのビデオを鑑賞した後、最後に商店街が呪われたみたいなメッセージがあつて、商店街の呪いを解くために、この暗号を解いて、この観音様のところ行ってください、ということでみんな一生懸命走り回ってくれて、メッセージを解いて、ここに届けるとキャンディがもらえる人が待ってるっていう、そういう仕掛けだったんですけど。

高橋：ビデオ鑑賞しているところは、商店街の中に山北体育館っていうところがあつて、本当に昭和の味をそのまま活かしている体育館なんで、非常にイベント会場としては、すごく適している場所だったかなと思います。

岩室：百崎くんはビデオをまた作ってくれてるんですが、どうでしたか、編集大変だったと思うけど。

百崎：一番手こずったのが、意外とお肉屋さんのブーンみたいな音が、そのノイズをカットする作業に追われました。そのくらいです。

岩室：じゃあ、山北のアクターたちは、ビデオ、出演してみてどうでしたか。グルメレポー

トは上手に出来てたんじゃない？

茂川：質問するレポーターがもう少し増えたら良かったなと思って。

岩室：でも、グルメレポートのコツみたいなのを、勉強してきてたんだよね。まず見ためを言い、次に触感を言い、味を言うっていう段階があるらしいとかって3人で、じゃあどう言う、どんなこと聞かかも研究してきて、ノートに書いてきてくれて。ちゃんと準備してきてくれたら、ちゃんと出来たんだと思うんだけど。山北は、どんな町ですか。せっかくなのでいいところ教えて下さい。

杉本：山北町は、あんまり若い人がいません。結構年齢が高い人が多くて、その人たちはすごい優しくて、いつも助けてもらってます。そういう町です。

岩室：ありがとうございます。すごく空気がきれいだし、滝があったり、おいしいものがあったり。ハイキングに来る人、よく見かけました。

・音楽と文化を考えるきっかけづくりに子どもたちが参加する

神奈川フィルハーモニー

次にご紹介する神奈川フィルハーモニーは今日、みなとみらいのホールで第九のコンサートの日に当たってしまい、来れません。今回は神奈フィルのキャラクターである、ブルーダルのLINEスタンプを作り、その販売の一部を神奈フィルに寄付できるというしくみを提案しました。ここからすぐの万国橋倉庫の中にある、デザインの会社、NDCグラフィックスさんが全面協力してくださって、実はもうほとんど発売直前まで来ています。来年の1月16日にみなとみらいのコンサートの会場でLINEスタンプのお披露目をすることになりました。もし、みなさんの中で、来てもいいよって人があったら、コンサートを聴きながらプロモーションにも参加してもらえたら、いいなと思います。じゃあLINEのスタンプの紹介をしてもらいます。矢野淳奈ちゃんをお願いします。

矢野淳奈：大ニュース、僕、ブルーダルのスタンプがもうすぐ出るよ。いろんな気持ちを伝えたり、(Thank you, Happy Birthday)、メッセージを伝えたり (Merry X'mas、おけおめ)、季節の挨拶や、(♪)、いろんな楽器も演奏しちゃう。収益の一部は神奈川フィルに寄付されるんだ。楽しく使ってくれると嬉しいな。

岩室：このブルーダルですが、神奈川新聞の日曜番に4コマ漫画で使われています。これから1月に向けて神奈川新聞の4コマ漫画に「LINEが出るよ」っていう4コマ漫画になっていくと思うんですけど。ブルーダルが神奈フィルのキャラクターだっていることを知っている人が少なく、ブルーダルも知名度がもう少し、というところがあったので、神奈川のフィルのキャラクターとしてのもう少し知名度アップのために、LINEスタンプ作りましょうということになりました。

その時に制作を検討する立場の大人が、あまりLINEって使う人がいなくて、実はデザイナーさんも全然で、LINEはこれを機に使い始めたぐらいだったので、実際に使っているアクターのみなさんに意見を聞きたいということで、「こんなのが使いたい、こんなのだったら使えるよ」っていうのも書いてほしくて、それでデザインの基本を作って、何回か会議して今回に至ったことになりました。もちろん有料で売らなすけれども、そのうちの半分はLINEの会社、その残りの半分の一部が神奈川フィルに行くということで、神奈川フィルを応援するために、スタンプを買って、応援しようっていう基金になっています。

このブルーダルについて、今まで知ってた人います？このブルーダルって、ダルメシアン

です。ダルメシアンが昔、横浜港の馬車を先導する役割をしてたらしくて、こういうワンちゃんが横浜で活躍したのが、日本で最初だったんじゃないかということです。

このワンちゃんは実際白くってですね、カクテルを飲むと水色の模様がでる、かわいいキャラクターなんです。LINEは使える人が限られていますし、いまはまだ小学生とか使っていない子も多いと思うんですけど、ついでにというか、LINEみたいなスタンプのシールも出るらしくて、それを手帳とか貼ったりするのなども考えていきたいという話でした。

神奈フィルの方からは、音楽と文化を考えるっていうことに子ども達が入ってくれるっていうことが大事なことだっていうことを、楽団員やスタッフがまずはすごく感じて、それがすごく良かったと。子ども達がお手伝い、ボランティアで来ることはあったんですけども、そうじゃなくて、一緒になって考えるってことが大切だってことを知りました、と話でした。もしも今後も関わってくれることがあるとしたら、もっと深く、コンセプトから一緒に考えていかなきゃいけないのかなというお話がありました。ありがとうございました。LINEのスタンプの会議に関わった人いますか？

州濱：最初はひとつの方向でブルーダルが向くのに、途中から逆に向いてた。

岩室：ワンちゃんが？向くようになった？そうだった？そんな細かいとこ見てなかった。とてもかわいいんで、もしよかったらお父さん、お母さんにも使ってもらってください。ありがとうございました。神奈フィルの紹介でした。

さっきブルーダルの声を、今日突然やってくれた淳奈ちゃんは、将来声優になりたいそうなので、担当していただきました。うまくできてたと思います。次はですね。NPO 法人街カフェ大倉山ミエルの鈴木さん、お願いします。

● まちづくりのコンセプトを再確認することで新しい企画を

NPO 法人街カフェ大倉山ミエル

鈴木：こんにちは。大倉山ミエルの鈴木といいます。ミエルは商店街の中にスペースがあって、大倉山の商店街と地域の人をつなぐような活動をしています。運営も地域の人と一緒にやっているんですけども、今回一緒にやりたいなっていう風をお願いしたのは、なかなかやっぱり地域の人を商店街に、っていっても、特に子ども達の参加っていうのは難しくって、どういう風にしたらそれがうまく参加できるのかを、ミニシティのみなさんと一緒に考えられたらなってことでお願いしました。

実はやっていただいたことがハロウィンの1週間後のイベントっていうことで、私たちの方がそのハロウィンのイベントでいっぱいいっぱいになってしまっていて、なかなか最初に考えていた、地域の子も達を商店街に引き込むっていう、そのところのコンセプトがなかなか出来なかったんですけど。

でも今回岩室さんとミニシティの子ども達がやり取りするようすを見て、あつ、こういう風にすれば子ども達っていうのは、どんだんいろんな自分たちの思ったことを発揮して、私たち大人はこういう風に場所を用意してあげればできるんだな、っていうのを学ばせていただきました。

岩室：大倉山は、ギリシャを模した建築物が商店街のそこかしこにあって、それをテーマにないかできないかということになりました。大倉山記念館を見学をさせてもらい、まちを見せてもらった上で、なぜかギリシャのおばけ屋敷、っていうことになりました。今日は欠席しているんだけど、上菌さんが頭にゴムの蛇を入れ込んでメデューサの役をやってもらいま

した。この人はソクラテスですね。ギリシャといえばソクラテス。ソクラテスといえば、野坂昭如さん。違う？これは大人の会話ですね。大人がソクラテスだといっても子どもたちにはわからなかったの、ソクラテスのことをもうちょっとお知らせしようよ、っていう話にもなって。ソクラテスといえば「無知の知」。「無知の知」を暗号にして、その言葉を覚えて、叫ばないとおぼけ屋敷は出られないということでした。最後に、出た人には、おぼけケーキか目玉のゼリーをプレゼントしました。これおいしいらしいです。食べた？

鈴木：おいしかったですよ。はい、いただきました。

岩室：ちょっと気持ち悪いのは苦手です。目玉の形しているけど、カルピス味？

鈴木：杏仁豆腐味です。

岩室：(写真)これがオールキャストなんです。まず入り口(エルムの館)で商店街のクイズをやって、正解するとおぼけ屋敷に入る。ソクラテスとかメデューサがちょっと驚かすっていう。すごく子ども達が怖がってました。すごいちっちゃい子が多くて。

鈴木：そうですね。ハロウィン、1週間前にハロウィンがあって、その時のフォトコンテストの発表も兼ねていたので、やっぱりお母さんに連れられた小さい人達が多かったです。

岩室：なかなか次のイベントには、スタッフで参加してねって言えるだけの大きい子が来なくて、まだこれからなのかな～とは思ったんですけど。せっかくなんで、ソクラテスをやった清水くん一言。名演技で、みんなに役者になれば？って言われたくらいだったんです。どうでしたか、ソクラテスやって。

清水：ソクラティアやってて。

岩室：ソクラテスね。よく間違えて、「私の名前はソクラテオ」というだもん。違う、違う。ソクラテスね。

清水：名前はどうでもいいとして。ソクラテスやってて、小さい子が怖くて後ろにザーッと下がっていったってことを聞いて、怖がってもらってやった甲斐があったなって。

岩室：(マスクをかぶっているから)これ外、見えてるの？

清水：鼻の穴ら辺からしか見えなかった。

岩室：全然見えなかったの？じゃあ、何をやってるかわからないから、感想も言えないね。頑張ったね。はるなちゃんはどう？女神役だよ。どうでしたか？

田島：予想以上に来る子がちっちゃくて、抱っこされている赤ちゃんとかもいっぱいいて

岩室：そりゃ、まずいよね。

田島：どんぐらい驚かしていいのかっていうのが、わかんなかったんですけど、

岩室：赤ちゃんが落ちちゃったり、泣いちゃったりすると大変だもんね

田島：でも、大泣きしたり怖がってもらえて、すごく嬉しかったです。

岩室：あー、そうなんだ。結果的にはそれで良かったと。一応ね、目的はおぼけ屋敷だからね。なんでおぼけ屋敷になっちゃったのかわからないんだけど。

鈴木：最初に岩室さんの方から、せっかく子ども達が行くから、大倉山だってわかる場所、おすすめの名物を食べさせて下さいって言われた。その時に、せっかく大倉山なんだからって、なんか、こっちがあーそうだった、ギリシャとか、あーそうだったって、本当に逆に気づかせていただくことが多くって、それは本当に良かったです。

岩室：大倉山のおいしいもの食べたいよね、行ったらね。せっかくそこ行ったんだから、チェーン店の弁当を買うよりは、地元のおいしいもの食べたいなって思います。ありがとうございました。次はハッピーサークルですね。また商店街担当の県の鈴木さん登場ですね。

・イベントの曲とダンスづくり。子どもだけでなく大人も大喜び。

ハッピーサークル

鈴木：ハッピーサークル。川崎の幸区。西口に川崎はラゾーナっていう大型商業施設が出来たんですけど、ラゾーナの裏手にある商店街の人達が、もともとの商店街が、寂しくなっちゃって、ラゾーナが出来てさらに息の根が止まってしまったということで、今、商店街はもう活動をしていないんですね。だけど、商店街が活動してなくても、何かやらないと、このままでいてはいけないということ、商店街を越えて、やる気のある人たちが集まって、ハッピーサークルをつくりました。幸区ですからね、ハッピーサークル。区長が名前をつけたんですけど、ハッピーサークルを作って、和菓子屋さん、お魚屋さん、新聞屋さんとかですね、飲食店の人とか、その人たちが、地域の人達にもう少し自分たちのお店のこととか、知ってもらおうということで活動しています。

そのうちの 하나가「幸せ祭り」で、年に1回お祭りをやっています。お蕎麦屋さんが一番いい時期に大きなお店を作って、2階に大きな宴会場があるんですけど、今は旦那さんが亡くなって、あまりご商売の方をたくさんやってないんですね。ですから2階、空いちゃってる。じゃあその空いてるスペースをうまく活用して、地域の人達に喜んでもらおうということで、いろんなことやってます。幸せ祭りの他にも、コンサートやったりとかしてますね。幸せ祭りのコンセプトは、お休みの日に親子で来て、1日ゆっくり楽しんでもらおう、ということなんで、子ども達をもっと楽しませる企画が出来ないかなってことで、アクターにお手伝いをいただいたってことですね。

岩室：幸せ祭りの日はいくつか企画はやったんですけど、幸せ、ハッピーなので、曲を作ったら？ということになり、ハッピーサークルのテーマ、みたいな曲を子どもたちと作りました。これがダンスも子ども達が考えて、一緒に振付を教えて踊ってる写真ですね、当日は楽器づくりもして、その楽器を使って、振ったり、踊ったり。

みんなの幸せエピソードを集めたり。最後に地域ネタのクイズをやって、商店街からのプレゼントで賞品がもらえるっていうようなものをやったりとかしました。曲がありますんで、聴いてみましょう。ダンス教えてくれる？じゃあ、一緒をお願いします。で、ですね、曲をつくる時に幸せ祭りって話をしたら、「幸せばかりじゃないね」「幸せじゃない人もいるんじゃないの？」って。みんなで幸せ、幸せって、嘘っぽいな～って話もあって、ハッピーとアンハッピーっていうのもあり、ちょっと悲しい曲も入ってるんですよ。お願いします。

(曲)

岩室：ありがとうございます。いろいろ振り考えたり。ちっちゃい子がいっぱいいたので苦労したこともあったと思うんだけど。

田島：本番にまたまたちっちゃい子が多すぎて、言うことを聞いてくれなかったんですね。それで、いつの間にか、ちっちゃい子がいなくなってた時に、アクターの先輩の百崎くんが助けられて、ちゃんと踊れるようになったという。

岩室：なんか百ちゃんにいろいろ学んだって？どんなことを学んだの？

田島：百崎さんが子どもたちに好かれる理由がその時わかりまして。百崎さんはちっちゃい子と目を合わせたり、笑顔でずっといることが多くて、それでちっちゃい子によく好かれるんだなって学んで、真似したいなって思いました。

岩室：すごいね、なんか、すばらしいね。淳奈ちゃんはどうでしたか？歌とか参加したりし

て。

矢野：私は当日参加していないんですけども、歌と、ダンスのハッピーの方だけの振付をさせてもらって、パッパって決まって。結構楽しかったです。

岩室：司会もアクターがしてくれたんだけど、どうでしたか？クイズ大会の運営振りとかは。

鈴木：本当にいろいろイベントの構成があまりうまくいってなくて、思った通りにはいかなかったと思ったと思うんですけど、本当にありがとうございました。曲が、こちらも1日中これがエンドレスで流れておりまして、商店街の人が、実はさっきのブツブツ交換の歌を作った鋼管通商栄会が、川崎駅挟んで反対側なんですね。こっちのハッピーサークルの人が「うちの歌の方が絶対いいわ」って言ってましたね。非常に喜んで、お客さん楽しませていただいて本当にありがとうございました。

岩室：ありがとうございました。ハッピーサークルの歌は、実は私の家に何人か来てもらって、その場でジャンジャンと言いながら、どうするどうするって、本当に一から作ったんですよ。鋼管通の方は実は私が基本の曲を作って、歌詞を入れてもらってたりとかして、大人が一部作ったってことはあったんですけど。今回の曲は一からみんなで作ったんです。私も音楽をやってて、こういうところで少し役に立てると良かったなと思います。次は湯河原ですね。これも続いて鈴木さんをお願いします。湯河原なんですけど、最初は何をやるかもあんまり決まっていなくて、子ども達が朝市に参加して、ランチに参加してっていうことで。

景観の保存や町民のコミュニケーション、外国人観光客対応・・・現場に参加したことで気がたくさん

湯河原明店街

鈴木：湯河原の駅前商店街で、ランチという、朝市みたいなものなんですけど、基本的には手作り市って呼んでいて、みんな仕入れてくるのではなくて、手作りの物を、食べるものを含めてですね、売るイベントをやっています。子ども達に手伝ってもらって。コンセプト、どういう風にしようかなっていった時に、湯河原というのは、一説としてたぬきが温泉を発見したという話がありましてですね、たぬきがキャラクターとして湯河原で使われている。じゃあそれに引っかけてやっていこうってことで。たぬきの格好をしてもらって、たぬきになりとですね、揚げ玉をトッピングしたアイスクリームなどを出してもらいました。

岩室：そうですね。ソフトクリームに天かすという、意外な組み合わせがカリカリとして、ちょっと脂っこい。一応たぬきってことで、やらせていただいたんですけど。今回、商店街の方が忙しかったり、場所が遠かったりして、打ち合わせの時間もそんなにたくさんは持たず、もっと基本的なまちづくりにも突っ込みたかったアクターもいました。それで高橋くんが考えをまとめてくれているので、せっかくなんで、発表してもらってもいい？湯河原についてすごく熱い思いがあって、やりたいことがたくさんあるようなので、今後のためにもぜひ何やりたいか、提案してもらおうと思います。

高橋：湯河原って一応、相模の小京都っていう銘柄があるじゃないですか。それを、守り続けるっていうか、そのためには、今ある2つの古い旅館、建物を守る、というか保存する必要があるんじゃないですか。一つ、今もう壊すのが決定しちゃって、エクシブっていう新しいホテルが建っちゃうとか、そういうことになってるじゃないですか。今、もう一つ残っているフジヤさんを保存したりだとか、そういうことをしていく必要があると思います。

あと、名店街の方では、今回ランチやったじゃないですか。ランチで、お店を出してた時に、地元の中学生や小学生がボランティアで途中から参加してくれましたよね。その時に思ったことは、湯河原以外の場所から派遣された子ども達の役割っていうのは、地元の子ども達に自分たちの活動を引き継いでもらうっていう、そういうつながりを持ってほしいと思うんですよ。中学生や小学生がそういう発想を展開できる場所としてひとつ必要なのが、図書館だと思うんですね。そういうコミュニケーションが取れる施設っていうのが必要だと思うんです。図書館が湯河原駅の目の前に、本当に目の前あるじゃないですか。そこを例えばカフェと併設したりですとか、湯河原駅のまわりって、観光客が寄ってみたいと思うようなカフェって、やっぱりはっきり言って少ないんですよ。だからそこで図書館とカフェを併設して、観光客も電車待つ間とか立ち寄れたらいいなと思います。

岩室：外国人は箱根に結構行っちゃうから、ついでに1泊湯河原に寄ってもらえるような、そういう回遊のサイトとかを英語で作ったらいいなっていうようなことも言ってたね。

高橋：「箱根に行きたいんだけど、道、どうやって行くの」っていう風に、この前ランチのときに、外国人に尋ねられたんですよ。

岩室：駅で聞かれたらいいですよ。

高橋：湯河原に泊まって、箱根に行こうとしている人たちとかもいるので、そこでやはり、箱根で楽しんで後、今度湯河原に泊まりに来てくれるようなプラン、っていうのを外国人に提供できるような取り組みもしていけたらいいなと思って。外国人向けの観光サイトにコンテンツを取ってみたりはしているんですけど、そういうプランを提示していくことも必要だと思います。

鈴木：ぜひ、商店街の人に伝えたいと思います。

岩室：ちょっと商店街の領域を超えているので、ぜひ神奈川県として。いろんな方向に。

鈴木：のちほどまた。

岩室：本当に一生懸命考えてくれていて、しかも彼はお友達が湯河原に住んでいるようですね、高校生として思うことがあるんだと思います。

鈴木：ひとつだけ、相模の小京都って言ったんですけど、実はいろいろな大人の事情で使わなくなってしまいました。いいなと、僕は思うんですけど、なぜか使わないというのが、町長が言ってるとか言わないとか。それはちょっと残念だなと。つまらない大人の事情でね、いろいろ、どうもありがとうございます。ぜひ、それ活かしていきたいですね。

岩室：そうですね。せっかくいろいろ考えてくれてることが、ひとつでもどっかにつながっていければいいなと思います。ありがとうございます。高橋くんもありがとうございます。それでは最後になりますね。かながわブラインドスキークラブの方、お願いします。どうぞ。

● 障がい者と子どもたちが出会うことでお互い大きな発見が。

かながわブラインドスキークラブ

小林：かながわブラインドスキーの小林と申します。

小林：オーエン。盲導犬のオーエンもきています。私どものスキークラブっていうのはブラインドスキー、視覚障がい者のスキークラブです。今年で30年になります。赤十字などいろんな公的機関が、視覚障がい者にスキーを教えてきてたんですが、積極的に自分たちで企画をして、自分たちでやってみたいという視覚障がい者から発案があって、ボランティアを募集して、スキークラブを作り上げたっていうのを、日本で一番先にやったのがうちのクラ

ブです。最近では東京あたりでもかなり増えてきたんですが。

今回のお願いはみなさんと一緒にズーラシア（動物園）を歩いてもらいました。視覚障がい者は当たり前ですけど、一人で長い距離歩けない。一人でスキーやるんだけど、トレーニングが出来ないんです。絶対そこには人の手を借りてやらなきゃいけない。先日、湘南マラソンの時も、やっぱり友達に手を輪っかですつないでもらって走ったり。シーズン前にこういうイベントを入れて、たくさん歩くという形を入れてます。

今回は視覚障がい者と自分たちのトレーニングだけじゃ、アクターのみんが参加できないってことで、情報をいただいて、ウォーキングイベントに参加しました。

アクターのみなさん、目の見えない人を案内するってことに、本当に後ろから見てると、肩が緊張して、ガチガチだったのがよくわかったんですよね。でも慣れてくると、当たり前なんだけど、目が見えないだけで普通に人なんだってことがわかり、説明のしかた（誘導のしかた）もとてもよく出来てたし、肩の力も抜けて、非常に気を遣って動いていただけました。

私どものクラブも、アクターのみなさんにも、視覚障がい者が一般の人と同じゲレンデでスキーを楽しんでることが、知っていただけたことがとても嬉しいんです。今これから一般のみなさんが、もっともっと街角でも、視覚障がい者を見つけた時に、肩を貸しましょうかって言ってくれるだけでも良かったです。これから、もっとこういう企画をやって、視覚障がい者はもちろん、その家族、お友達を呼んで、できるような形にしていけたらいいなと思ってます。

岩室：ありがとうございます。クラブのみなさんはだいたい年齢はどのぐらいの方たちが多いんですか？

小林：平均年齢ですか？非常に上がってきちゃってるんです。

岩室：もちろんこのぐらいの子はいない感じですか？

小林：そうですね。何かの機会があれば、家族で来る小さい子もいます。うちの子どももちっちゃんい時に「僕でもね、ごはん運ぶぐらいは出来る」って言って参加していました。自分の役割としてね。それで連れて行ったことはあります。家族でスキーをする方もいらっしゃると思うんですよね。そういう方でも本当にここに来てくれたらいいなと思います。

岩室：子ども達にとってももちろん、すごくいい経験になると思うんですけども、スキークラブの方たちにとっても、やっぱりにぎやかというか、明るいというか、新鮮感と一緒にやっていただけたら、それは大人にとって良かったのかなと思うんです。

小林：そうですね。とても、僕らの団体50代ぐらいですか、平均年齢が。なかなかお互いの会話もとても爺臭い話になってしまうんで、子ども達の率直な、いろんな視点で、いろんなものを見た時に言ってくれる言葉が、僕なんか、その言葉を想像していろんなものを感じるんで、子どもの新鮮な意見っていうのはすごく発見がある。あっ、今までそうは思ってたんですけど、あっ、そういう感じで見えてるんだと。とても面白いウォーキングになるんですよね。そういうところはすごく良かったなと思いますね。

岩室：じゃあ、案内したアクターの誰か？どうだった？

橋本：最初はやっぱり、目の見えない人、視覚障がい者の方って、すごいカバーしてあげなきゃいけないかなと思って、おっしゃる通りすごい緊張してたんですけど。やっぱりキウではなくて、喋ってるうちに、目が見えないだけで普通の人と同じなんですけど、やっぱり目が見えないところを思いやる心っていうのが、すごく難しいなと思ったんです。やっぱり案

内していて、人の役に立ててるんだっていう気持ちもすごくあって、おしゃべりしていても楽しい会話となったので、いい体験でした。

岩室：みなみちゃんの感想が新聞に載ってたと思うんだけど、景色や情景とか、様子を伝えるために、一生懸命見る、より見るってことが出来たって言ってたよね。

橋本：歩く速度も遅くなるんですけど、ゾーラシアはテーマによって生えてる植物とか木とかもいろいろ違うので、そういうところもじっくり観察できて、いろいろ発見が出来たりしました。

岩室：わかりました。山田くんどうですか？山田くん、隠れてないで。さっきから、当てられるんじゃないかってこっち見て。絶対当てられるよね。スキークラブ、ずっと参加して。どうですかやってみて。

山田：最初は緊張してて。一緒に歩いて、いろいろ話とかをしたりして、だんだん話してても緊張しなくなって、動物の特徴を説明するのが難しくて。もしまたそういう機会があったら、もうちょい詳しく説明できるようになりたい。

岩室：勉強しとく？ありがとうございます。またぜひ、一緒に歩ける時があったら、絶対参加するって言ってますので、よろしくお願いします。ありがとうございます。最後って言ってたんですけど、あと一つ抜けてた団体がありましたので、紹介したいと思います。保土ヶ谷ですね。

● 「おとなの悩み相談室」の悩みは子どものことばかり

ほどがや子どもニコニコフェスタ

杉山：ほどがや子どもニコニコフェスタは、保土ヶ谷区の子育てひろばをやっている団体が集まってやるイベントでですね、依頼があったときには、当初、あらかじめメニューあって、お手伝いを派遣してほしいというような話で、イベント全体のお手伝いだったんですが、それだけだと子ども達がやりたいことができないよね、ということで、疑似通貨を使った子どものまちの小さなイベントをすることになりました。全体の中で、そこの部屋をひとつ確保してもらって、子ども達、親子連れが入れ替わり立ち代り来るような子どものまちイベントをしました。

矢野淳奈：当日は予想以上に人が結構来てて、ぎゅうぎゅう詰めになってたりとかして、私はジョブセンターやったんですけど、いまいちジョブセンターっていうものが、伝わらなくて。

岩室：説明が難しかった？

矢野：説明というか、ここはお仕事とする場所なんだよって言っても、お仕事をすることっていうことがまずわかってもらえなかったりとか、...

岩室：小さくて？

矢野：ちっちゃい子が結構多くて。

岩室：そうなんだよね。派遣された薬師川さんから聞いたのですが、大人の悩み相談室をやってたんですが、大人って悩みが多いんだなっていうか、ほとんどの悩みが子どもの子育てに関することだった。「反抗期なんですけどどうしましょう」とか、「自分の言うこと聞いてくれない」という、もんもんとした相談受けたらしいんですよ。でも何も返ることができなくて、「時期が来れば解決すると思います」とか、「成長すれば大丈夫だと思います」としか言えなくて、私は何の力にもなれなかったって、ものすごく悔やんでましたよ。

杉山：子どものまちってというのは、子どもがお店やさんごっこ的なものをして遊ぶような、そういう仕組みなんです。要は子どもがこれがしたいということアルバイトでやって、今回はお菓子釣屋さんなんかがあった。その中で大人の悩み相談室っていうのがあり、悩み相談員のアルバイトもある。何分か働いたら、子どものまちのお金がもらえて、それを使ってまた他の遊びをやるみたいな、そういうものです。結構これはミニシティプラスが得意としてるイベントのひとつなんです。どんなものを使ったかは、展示のところに置いておきますのでみてください。

=====休憩=====

第二部

● アクター活動をふり返り・・・

● 参加の動機

岩室：それでは後半をスタートします。

みなさまの質問の一つに、アクターに参加することになった人に活動の参加の動機はどのような経緯から？とありますが、アクターに参加することになった経緯を Yes、No 形式で挙げてください。家族の方から言われて参加した方は Yes。

意外と少ないですね。ではマイクを向けていきます。Yes の方はどういった経緯でしょうか。

山部：つづきジュニア編集局で配られたプリント中に入っていて、やってみたら面白いのはと提案されて参加しました。

岩室：参加してどうでしたか。

山部：すごく楽しかったし、学校では出来ないような活動が出来て勉強になりました。

岩室：ありがとうございます。他に Yes の方は？

高橋：私は元々大学受験の AO 入試の活動実績を満たす為に親に進められて参加しました。

岩室：役に立ちそうですか？少し難しいでしょうか。

高橋：これを期に派遣された湯河原という所にもう少し深く取組んでいくきっかけになればいいと思います。

岩室：ありがとうございます。必ず何処か良い処に繋がられるよう頑張ります。他にも手が挙がっていたので、順次伺っていきます。

洲濱：僕の場合は確か新聞だったと思います。親が新聞で募集告知を見つけて、やってみたらどうと勧められて参加しました。最初はあんまりやる気ではなかったけれど、兄弟の泰もやるというので一緒にやってみることにしました。

岩室：やってみてどうでしたか。

洲濱：普通に楽しかったです。

岩室：普通に楽しかったですか（苦笑）。ありがとうございます。次の方をお願いします。

清水：自分はジュニア記者で、アクター募集のチラシをみて、ジュニア記者とは違うものなのかなと思い、ではやってみようと思って参加しました。

岩室：勧められたのは家族の方ですか？

清水：はい。

岩室：役にたっていますか？

清水：話のタネにはなっています。 会場（笑）

岩室：話のタネですか（苦笑）。では、そうではない他の人はどういったきっかけで来ているのかな。Noの人はありますか？手をあげてください。

松澤：両親ではなくて加治さんと同じ学校同じクラスで、声をかけてもらいました。やってみたら面白くて今年もやろうと思ったら忙しく参加できなかつたです。

結城：母にすすめられて参加したのですが、あんまり良く覚えていませんがすごく面白キウだなと思って参加しました。すごく良い経験にもなったし学校生活とかにも活かせることも一杯出てきたので、良かったと思います。

森田：ジュニア編集局のチラシを見て、学校では学べないこととか書いてあったので自分で参加しました。

岩室：やるって言った時に家族の方はどう言われましたか。

森田：家族は自分に向いているよと、頑張ると言われました。

岩室：この前話していた時に学校と家との間に全く商店街も店もなくてつまらないからと話していましたね？

森田：塾の帰りなどはららぽーとがある位で本当にキウいう交流する場があまりないので他の地域に行くことによって、商店街の人たちと話すのは貴重な体験だったと思います。

岩室：なかなか、ららぽーとのお店の人と会話というのも、そういう場所ではないかもしれないですね。

では先程書いてもらったのですが、自分がアクターになって良かったことというのを書いてもらったので、見せてもらってよいですか。誰かお話してもらえませんか。

● 自分がアクターになって良かったこと

山部：色々なまちの良い処や地域の特徴を知ることが出来ました。その特徴を活かしてイベント等を考えることも重要だなと思いました。

黒川：今迄知らなかった各地域の行っているイベントが漠然と描かれる迄の道のりとか、その準備が重なって長い期間があるのだなと思いました。

茂川：アクターをやる前は自分の住んでいた街があんまりいいと思えませんでした。アクターをやってから、自分の街に自然がある処や人が優しい処がとて良いなと思いました。

岩室：それはすごく良いことですね。誰か発見できないこと、他の人が来てくれて初めて、こういう処良いなとわかった処ありますよね。はい、お願いします。

三木：アクターになる前は山北町内で活動していることが多かったのですが、アクターになってからは山北町以外で活動出来て、それぞれ地元の会というのが、行った地域で成り立っていることがわかってすごくよかつたです。

高橋（お）：私はコミュニケーション能力が上がったと思いました。学校では友達や先生と話すと言うよりは、仲が良い人とししか関わらないことが多かったので、アクターを経てから地域の人たちに積極的に話しかけて、コミュニケーション能力がすごく上がったと思いました。

杉本：私はボランティア活動の範囲が広がりました。3人の仲間とは少し離れた場所に住んでいます。そこは住んでいる人の数が少なく、ゴミを拾う活動の時に拾う人が少なくて。隣にいる亜仁多さんにアクターの活動を紹介されて、入っていから地域活動のことをよくわ

かるようになりまして。

岩室：ありがとうございました。では、あと一人か二人聞きましょう。

神田：私はいろんなお祭りの色々な本番が知れました。今迄地域のお祭りに行くだけだったので他の地域の特徴など知れて良かったです。

岩室：今まではお祭りの本番にしか参加したことがなくて色々な準備から今回は関わったことでわかってきたということでしょうか。

矢野颯人：いろんな街に行き、街の人と触れ合い、その街のことを良く知れたかなと思いました。温泉では、別府、熱海とかしか知らないのですが、湯河原という所を初めて知りました。

岩室：本当に。湯河原は有名だと思っていたけれど、まだまだ知られていなかったのですね。それは良かったです。

● 大人にいたいこと

それでは大人の人にいたいことはありますか？

森田：先程全部説明された、どのイベントも、とても皆が楽しめるイベントがたくさんあったので、これからもずっと楽しめるイベントを増やしたり、続けて欲しいなと思いました。

岩室：それはアクターの自分達が行かなくてもやって欲しい、ということですか。来なくなったからといって、やめて欲しくはないですよ。他に大人にいたいことがある人？

橋本：私はもう少し話し合いの場というか時間が欲しかったかなと思います。

岩室：ちょっと打合せ等の時間が足りなかったですか？

橋本：あんまり子どもだけで決めるのが少なかったというか、実行することは出来たのですが、決めることはあまり出来なかったように思います。

岩室：それはどんなイベントですか？

橋本：グラインドスキーなどは行く場所が決めてあって、そこだけだったので。

岩室：そうですね。打合せもなかなか出来なかったですね。もっと打ち合わせも色々話し合いながらやりとりしていけたらなということですね。

橋本：はい。

小林：今年スキークラブが30周年で、いつもイベントを行うのは秋なんです。それがこの秋はイベントが入り、急遽前倒しになってしまいました。もっともっと皆さんと話し合っ
て色々なことのアイディアを学べたら良かったのですが、こういう形で申し訳なかったです。今度行う時には、いっぱい打ち合わせをして楽しいことを入れていきたいと思っています。よろしくお願いします。

岩室：多分、イベントがどうと言うよりも、単に会って一緒になって話すとか、イベントを企画しなくても、会話を楽しむとか、そういったお茶会とかでもいいのではないかと思います。イベントだけの機会ではなくて、もう少し触れ合う機会があっても良かったですね。それでは次は井藤さん、どうぞ。

井藤：今年初めてアクターに参加したのですが、色々な経験が出来たので本当に参加させてもらって良かったと思いました。

岩室：ゆきりさんは参加したきっかけは何だったのですか。

井藤：あんまり覚えていないのですが、親がチラシを持ってきたのを見て・・・。

岩室：やれやれ！と言われた訳ではないのですね。

井藤：キウではないです。

岩室：自分の意思で面白そうだなと思って参加してくれたんですね。彼女は物すごく小さい時、から知り合いなんですよ。私は彼女のお母さんと一緒にNPOで活動しているんです。けれど、こちらの活動には一度も来たことがなくて、高校生になって初めて来てくれて本当に嬉しく思います。

(フリップをみて)「チャンスをください」。どんなチャンスでしょうか？松澤くん。

松澤：キウですね。先程のアクターになって良かったこととかぶってしまうのですが、やはり普段の生活で出来ないことが出来る。普段の学校に行っただけで字を書いている、キウという生活の中で、商店街の街おこしに参加するというのはなかなか出来ないことだと思います。僕自身、バイト等で忙しくて参加が出来なくて、実際に活動したのは短い期間なのですが、人前に出て話をしたり、町の人や市長をインタビューしたりして、すごく良い刺激を得ました。僕は本当に人前に出て話をするのが苦手で、前はこういう場で話せなかったのですが、今はこうやって話せるようになりました。キウという成長はアクターに参加しなければならなかった成長です。僕たちはまだまだこれから、将来はなんにでもなれる可能性があると思うのですが、その可能性を、今を生きるその道のプロである大人の皆さんに教えてもらって、学ばせてもらって、しっかりとした未来を作るチャンスをお願いしたいなと思っています。

岩室：松澤くんは今もマスクをしていますけれど、会った時から一度もマスクを外したことがなくて、ジュースを出した時は知らない内にすうっとマスクをしながらジュースを飲んで、なんなんだろうという位マスクを外さない人だったのですが、最近、明るくなってきたような気がします。

松澤：アクターのおかげです。

岩室：それでは田島さんお願いします。大人にいいたいことは？

田島：大倉山のお化け屋敷をした時に、最後大人の人に入ってもらって驚かせたのですが、やはり大人だから全然怖がってなくて、苦笑いで終わることがあって、ノリが悪いぞという感じでした。だからもうちょっと楽しんで笑顔で参加して欲しいなと思いました。

大倉山ミエル) ちょっと出遅れてしまって。

岩室：そう言うことは多いですね。せっかくやっているのに、大人だけしらあつと言うことは多いです。実は大倉山の方は、お化け屋敷があまり怖くなくて、どうしようと思ったので、私はなんとかしなければと思い、怖さを出そうと、きゃあきゃあ一日中騒いでいました。すると翌日声がでなくなりました。

では隣の矢野くんは？

矢野颯人) 色々ご迷惑をお掛けし、誠にすみませんでした。

岩室：鋼管通りのイベントの担当だったのに本番にいなかったですよ。射的を担当していたのですが、そこを当日来た洲濱くん達が担当してくれた。

百崎：子どもの可能性を信じて欲しいのです。アクターだけではなくて、子どもがボランティアに関わる機会は学校からも呼びかけとかがあるのですが、普通ボランティアに参加するにしても大人であつたらこと前説明会があつたり、こと前に顔合わせがあつたりすると思うのですが、子どもの場合は突然呼び出されて、ではこれをやってくださいとなります。それでは毎年毎年イベントを行っても何も変わらないかなと思います。もう少し色々な所で子どもと一緒にイベント作りをやって欲しいなと心から思っています。

- おとなのイメージ

岩室：では次に会場からの質問で「大人というのはどういうイメージですか？」とあります。良いイメージの人は Yes を挙げてください。悪い人は No、無理に Yes を挙げる必要はありません。皆さん Yes が多いようですが、わからない方もありますね。No の方はいませんか？では No の方、発言をお願いします。

矢野淳奈：小学生の頃は、大人は何でも出来て当たり前なんだと思っていました。アクターを体験して、今はもちろん大人にも心配はあるし、逆に子どもたちにも出来ることがある。Yes、No と区別出来ないのですが、大人でも、全部出来るというよりは、出来なくて当たり前なんだという、イメージが No というよりは、欠点があって当たり前なんだなということがわかりました。

井藤：アクターに参加して、他の方も発言されていますが、大人でもやっぱり出来ないことはあるんだなと、子どもの力を使いたいと思っているくらいだから、大人もそういう対応出来ないこともあるのだなと。

岩室：当たり前のことなんですね。いつになっても、大人になったかどうかわからない大人が結構多いと思います。頑張らなければならないのだけれど、迷うことも毎日あるし、皆さんと同じか、少し経験が増えたくらいで、意外と頼りないものです。

橋本：大人そのものが嫌いな訳ではなくて、子どもみたいな大人もいると思うし、大人と子どもの境界線って微妙だと思うのですが、自分は大人だと、子どもと区別している大人があまり好きではありません。

岩室：そういう意味での No ですね。結構皆さん肯定的に Yes の方の声があって安心しました。大人の人は基本的に味方だと思うので、ダメモトでもで相談してみてください。私も皆さんから相談されたら、一生懸命考えます。

- 活性化が難しいまち

では、街おこし、商店街活性化の企画に参加した方への質問です。そこが流行らない理由について、どのような理由があると思いますか。商店街が盛り上がっていないことに対して、どんな理由があると思いますか。その理由を当事者の人たちと同じように思ったりしましたか、という質問がきています。

百崎：色々な地域があってお店の場所が離れているという問題もあると思うのですが、せっかくイベントをやっている、ハッピーサークルって蕎麦屋の建物の1階2階を使ってイベントをやっているのですが、もうちょっと商店街全体を使ってイベントが出来たら、回りの通りすがりの人も何をやっているのかなと思ってのどきに来て、それがその商店街を知るきっかけになるのではないかなと思います。

高橋：湯河原のイメージキャラクターとして、ゆたぽんファイブと今回開発されたためぎ姫とかがあるのですが、正直、そのキャラクターを求めて湯河原に来てくれる人っているのでしょうか。皆さんどう思いますか、多いと思いますか。実際には多分キャラクターとかでは無く、観光客だとか地元の人々の需要にあったもののを求めていかなければならないと思います。例えば外国人観光客をターゲットに開発した宿だとか景観を整えたりすること

の方が、おそらく新しいキャラクターとかの開発よりも重要なことだと思います。

岩室：多分新しいキャラクターも、もし人気が出たら、そのグッズの売上とかも考慮しているのかもしれないですね。高橋くんの世代から見ると、そういうことではなくて、もっと街の基本的なこと、景観を守る形の方が重要だと感じたということですね。本当にその通りです。他に商店街について何かありますか？

大倉山・鈴木) 大倉山はシャッター通りにはなっていないのだけれど、新しく入ってくるお店屋さんが、皆チェーン店だったりして、本当に地元の商店といえるようなお店が、なくなってきている。先程あった、大きなショッピングセンターでお店の人とお話できない、という同じような状況になっているので、少しずつ残っている個人商店主さん達をやっぱりこれから私達が盛り上げていかなければならないなあと思います。今日のお話で、(お店の人と) 話が出来るといことが子どもたちにとってもすごく大事なことだなと思いました。

三浦・内藤) そうですね。以前三崎の下町もシャッター通りになりつつあったのですが、少しずつ、よその人たちが店舗を借りたり買い取ったりして全く別のものを始めてシャッターが開き始めているのです。ただ、あまり広くない商店街も、通りによって、幾つかに分かれているのです。出来れば一つになって、何か共通のイベントが出来たらなと思っています。ちょっと三崎は田舎なので、田舎気質というか、少しかたい処があって、それをこれからの崩していってくれたらなと思います。

岩室：ありがとうございます。そういう時に、子ども達がやってくれることだからしょうがないなあって、ではやってみようかとなっていくようなことになればいいなと思います。子ども達がやってみたいといってるから、まあ、ちょっとやってみようか思ってもらえると価値がありますね。三崎の方は若い人たちがお店を新しく出したりはじめたり、すてきな場所が増えてる、そういうのはすごくいいなと思います。

- 地域の人と交流する中で印象に残った出来こと

では地域の人と交流する中で印象に残った出来ことや、言われた言葉があれば教えてくださいと質問がありますが、何方か地域の人と交流する中で印象に残ったことなどありますか？

橋本：ブラインドスキーの視覚障がい者の方と歩いていて、私が思った色んなことが（ここで話すのに）不向きなことだなと話したら、視覚障がい者の方と歩くことで見えるものもあるんだよねと言われ、すごく印象に残りました。

岩室：深いですね。

結城：話していて印象に残ったことなどではないのですが、三浦の企画で、下見に行った時にその土地の歴史とか特有の物を大事にしていること、オンリーワンというか、その土地にしかないことで大事にしていること、そこの周辺が活性化されていくんだなというのを実感しました。

岩室：凄いですね。みんなにこと前にヒアリングしたときに、本当に地元の人たちが地域愛が強い、愛しているんだな～というのがわかった、という話を多くのアクターが話してくれました。

次の質問にお金の最低単位を何で1万円にしたのですかとありました。何か経緯があったのですか？私はいなかったかもしれないのですが。

アソシエ・元木) それはむしろ洲濱君に聞きたいのですけれど。お金のデザインをする！と宣言してくれて、出来上がっていたんですね。そしたら1万円札しかないという、なのでお昼には銀行が破綻するという事態に陥りまして。誰も預金しないし。

岩室：もうちょっと細かいものを作っても良かったのではないですか？どう思います？洲濱くん1種類しか作らなかったのは何か意味があったのですか？

洲濱：なんかでかい方がうれしいじゃないですか。単位が。

アソシエ・元木) 実際、前日にアルバイトカードを作って、その工賃としてプラス10万オルタというのをあげたんですね。そうしたら、やっぱりお金持ちになった気分になって、幼稚園の子ども達もいたので、本当に急にこれは使わないで貯めると言い出して。子どもってんかゼロがいっぱい付いているということに喜びを感じるんだなということを感じた瞬間でした。

岩室：自分が自由に使えるお金があるのは、すごく嬉しいことかもしれないですね。

● おいしいものが食べられるアクター??

次に「何処で食べたものが一番美味しかったか教えてください」という質問。アクターに参加して、何か一番良かったってきいたら、開口一番、草郷さんが、色んな所について美味しい物が食べられることだと。どれが美味しかったですか？どこの仕出し弁当が美味しかったですか？

草郷：どれも美味しかったですけど、今日食べた唐揚げ弁当が一番美味しかったです。去年も確か、こんなものだったような。超喜んでました。

岩室：今日のお弁当は本牧のハローカフェという所から運んでもらってます。他に美味しかったことってありますか？

清水：ドウカン通りのお弁当

岩室：ドウカンじゃなくて、鋼管通だよ！

清水：いつもは和菓子は好まないのですが、鋼管通の和菓子屋さんの和菓子はとても美味しくて、そこの和菓子屋さん、打ち合わせのときにチョコどら焼きの差し入れがあって。本当に美味しい和菓子屋さんだと思います。

神田：私も鋼管通のチョコどら焼きがすごく美味しかったと感じました。他にも鋼管通りの本番の時のお昼ご飯のラーメン屋さんのチャーハンとラーメンセットがすごく美味しかったです。

岩室：本当に商店街にはそういう美味しいお店が沢山ありますね。もっとありますか？

田島：私はハッピーサークルの熱々のカステラがすごく美味しかったです。私はカステラの黒い部分がすごく好きなのですが、あったかいから、より美味しかったです。

● 交通費の支給

岩室：あと一つの質問が、アクターのことをやっていく中で、この事業は神奈川県に助成金を戴いてやっているのですが、皆さんの交通費などそこから出ています。交通費位、親に出してもらったらという審査員の意見もあったんです。それでアクターはどういう風に思っているのかなというのを聞きました。そうしたら、結構いろんな意見がありました。それにつ

いて、誰か発言お願いしましょうか。松澤くん、見せてもらっていいですか？

松澤：先程も話したのですが、得るものが大きい、非常にこういう事業は僕もすごく楽しくて、その事業に参加したいなという気持ちがある、でも行きたい場所は遠い。じゃあ行けないねとなるのが物すごく僕は勿体無く感じました。そういう子は、そういう理由で参加出来ないなら交通費を出してもらって、行きたかったら行けるということが、僕はすごく大事だと思います。なので、また、5年後、10年後と、続けていただけたらと思っております。本当にお願ひします。

百崎：昨年、地域アクター、神奈川県の色々な所から応募があると思うのですが、なかなか三浦とか、山北とかすごく遠くて、往復で3000円とかかかってしまう場合もある。それは多分、子どもにはすごく大金だと思います。それを親に毎回毎回3000円下さいと言うのも、なかなか言いづらいと思います。アクターにせっかく参加したとしても、やっぱり交通費の問題で、近場の活動を選ばないと行けないとなると、本当に色々な所を知るチャンスがあるにも関わらず、そういう事情で行けなくなって、活動範囲が狭くなってしまふことはすごく勿体無い気がします。やはり交通費が出るということで子ども達が参加し易くなって、子どもたちが色々な所で勉強出来ている処なので、交通費を出してもらっていることは大きいと思います。

橋本：交通費を出してもらっていることは、私たちを必要としてくれているんだなと感じ、大人と対等の立場になった気がして、もっと頑張ろうとやる気も出ます。親が間に入らないということ、子どもの私たちがどんどん積極的に頑張っていけるかなあと思うので、ぜひ交通費は出してもらいたいです。

岩室：それでは最後に推進会議のメンバーから

横浜プランナーズネットワーク

山路：今日のテーマで子どもたちが地域に入っていくことで何が変わるのかということが、確か大きなテーマとしてありましたね。私が属している横浜プランナーズネットワークは、色々な地域に入って、そこで色々な地域活動をサポートしたりコーディネートしたりするというのが主な仕事なんです。地域づくりの場に入っていくと、ほとんど子どもの姿が無いんですよ。ところが最近、ほんの一筋なのですが、子どもが出るような場がちょっと増えてきました。ちょっと前迄はお年寄りの高齢化社会だから、おじいちゃん、おばあちゃんのことをしようか、それはおじいちゃんおばあちゃんが集まって議論していても大体みんな下を向いちゃうんですね。そこに子ども達が少し出るようになります。今 横浜中で地域福祉保健計画というのを作っています。大体300位の地域で作っています。その内の1つか2つしか私は知りませんが、その1つに、50人位のまちの人たちが集まっている中に小学生から大学生迄の20人位の子ども達がいました。その若いお父さんお母さん含めると全体の6、7割の人が30代位の人たちで、10人、20人位いたでしょうか。そうすると、そこで子どもがいると何が起こるかと言うことだけ申し上げると、普段、そのまちにいると結構つまらないことで喧嘩しているのです。そんな小さな地区で、ところが、子ども達が入ると、まず、喧嘩をするような発言は一つも出てこない。子どもの力がそうさせているというか、つまらないと言われたら大人の背筋が伸びるという風に感じました。2つ目は子どもに言われたことはなんとかやろうと、大人だけの話だといつまで経ってもやろうと言

わないのです。この2月に1回目を行ったのですが、その時に昔の太鼓が叩いてみたいと言った子がいました。この8月に2回目を行いました。すると太鼓のクラブが出来ていました。つまり、子どもが言うと大人はなんとかそれを実現してあげようとします。地域の子も達だから。それは子どもの力だと思います。他にも色々なことを感じます。これから、一番最初に三輪先生が仰っていたけれども、子どもをお客様にするのではなくて、子どもは企画者であって、運営者であって、自分たちがやっていく側にどんどん引き込んでいくというのが改めて大切なのではないかというふうに思っています。これから私はそういう時代が来ると信じています。以上になります。

アクションポータル横浜・横浜プランナーズネットワーク

内海：今日は非常に貴重な体験本当にありがとうございました。僕も思っていた以上にやっぱり凄いなというふうに思いました。結構遠くに行って自分の関心のあること、そして興味のあることをすると、することを通して結構その地域が好きになったり愛着が湧いたり、あるいは人の関係も少し出来て、何かあったらまた行ってみたいというような気持ちがかかり湧いているのだと、今日はお話を聞いて感じました。その一方で山北町の皆さんのように自分の地域、多分地域から出てもう少し都会に行きたいとか、そういう思いがある子どもたちも、この事業を取り組むことで自分の地域が好きになったり、或いは愛着が湧いて、結構ここで色々なことをやっていきたいと思ったという発表がありましたが、凄いなと。結局単純に言うと、大人は色々なことをやろうとしても、色々な固定観念とか、従来こうやってきたからこうやろうとか、いうことで実行するのですが、やはり子どもの目線で色々なアイデアを出すことによって、ある違う可能性が非常に出てくる。ですので、単純に助っ人として、手足として要請されて行くのではなくて、少し企画の内容についても、話し合いというやりとりがあってやりたい、というお話も大分皆さんから発表していただきました。多分それは遠くに行くと、頻繁にはなかなか行けないので、ちょっと工夫の仕方が必要かもしれないし、自分の住んでいる地域でやる場合には、多分そういうやりとりも比較的増えるなどというふうに思いますので、その辺も展開の仕方を少し工夫するとより、本当にやったという充実感が、単に手足でやったのではない形が出来るかなと思います。また、そのことで地域の方も商店街の活性化したり、地域がより良い形になるのかなということを今日は感じさせていただきました。どうもありがとうございます。

リスト株式会社

松本：リストの松本と申します。今日は本当に貴重なお話を聞くことが出来ました。結構感動してウルウルすることもあり本当に楽しかったです。4年活動が続いていて、質と量がすごく広がった活動になっていて、それは試行錯誤の質と量なので、すごくいい経験が皆さんにも団体の方にも蓄積されてきているなどというふうに感じました。私はリストという不動産会社なのですが、私どもの会社は東京でもハワイでも海外でも仕ことをしています。只やはり不動産というのは、地面があって始まるので、地域に根ざしていないといけません。私どもの会社は25年前に横浜で設立し、ここから本社を動かしたことはありません。地域が元気になっていかなければならないということを会社の経営理念と掲げておりまして、こういう席にも座らせていただいています。社会人から見た時に、アクターの皆さんにちょっとだけお話させていただきたいことがあります。コミュニケーション力とか視野を広げていくと

いうのは、大事だと良く言われていて、それはこういう活動を通して皆さんにはかなり広がっていると思います。もうちょっと先の話をする、何かを考えて企画する力、そしてそれを実現していくには、人を巻き込んでいかなければいけないのです。そう言うことが必要になってくるのを、多分皆さん徐々に経験で身につけていくと思いますけれど、頭の片隅に入れておいてもらえると社会人になった時に役立つかなと思います。ここまで活動の中身をもっと広げたいなと個人的には思っていて、どう言う風にすれば広げられるのかと言うのを、アクターの皆さんと団体の皆さん、それからサポートする推進会議のメンバーの中で考えていければいいなと思います。具体的には一つ二つ思っていることがあって、やはり地域と関わっていると、コミュニティづくりという処がどんな所でもテーマになっているので、それが一つですね。もう一つは環境です。今で言う低炭素社会、二酸化炭素をあまり出さないような社会にしていこうとことがありますので、そう言うことを、なん会の方で具体的なテーマがない場合は、若しくはそういうテーマを据えられる場合は、そういうテーマに据えていくと社会に、特にマスコミとか行政とかにも関心を示していただけるようになるのではと思いました。ありがとうございました。

岩室：ありがとうございました。リストさんからは、アクターにマリントワー無料券のプレゼントがありまして、後で配ります。

スマイルミニシティ・プロジェクト

山家：今日長い報告お疲れ様でした。僕は相模原の相模大野で若者の参画事業をやっています。そこでどうしても、相模大野という場所は先程ホットシェフの方も言われていましたが、なかなか難しい地域で掴みにくいということが大変でして、若者達が色々な工夫を考えて、色々考えて考えて考えて、ここで最後に一番足りない部分が行動するという事なのです。その行動するという部分迄アクターでやって戴いているのを見ていて、これはやはりそのまま相模大野の学生や若者達に伝えていきたいという風に考えています。皆さんが多分他の地域で企画を考えて行動まで移せるという処で、何かコツみたいなことはありますか？何か行動する処迄つながるとい、そこをちょっとききたいなと思います。

高橋：自分で考えたことは、まず形にしなければ意味がないと思います。いつも自分で考えていて自分の中で自己完結してしまうと、他人がキウ言うことを自分が考えていたのが全く知らない訳じゃないですか。だから発言したり行動したりして形にしていくことがいいと思います。考えたりしないと思います。

山家：その通りなんです、何処が他と違うのかなあと思いました。

岩室：他の所はなかなか行動まで移せないということですか。

山家：行動まで移せないですね。

井藤：私だけかもしれないのですが、やはり大人は後のこと等を色々考えるとと思うのですが、子どもはそこが多少、考えているとは思いますが、そんなに後のことをしっかり考えて行動はしていないと思います。

岩室：失敗したらどうしようなどと、あまり考えずに動くと言う意見ですか？

井藤：はい。

矢野颯人：自分だけかもしれないのですが、自分は頭がカウなので、直ぐに考えちゃうところは考えちゃうので、それが出来るかなと思います。

岩室：ちょっと意味がわからなかったのですが。頭がカラだから、行動がしやすいというこ

とですか？はい、ありがとうございます。次の方お願いします。

矢野淳奈：考えて誰かに知ってもらおうとか、誰かにこの自分が考えたことを見てもらいたいとか知ってもらいたい気持ちをまず持てば、キウしたら行動に移せるのではないかと思います。自分の中で考えて、じゃあキレでいいやという風に終わってしまったら、もちろんキレで終わってしまいますが、キコから誰かに知ってもらいたいとか、この企画を誰かと一緒に話してみたいとか、キウいうことが出たら、キコで行動に移せるのではないかと思いました。

岩室：だから先程言った、大人はしがらみもあって、後々のことを色々と考えてしまうけれど、子どもはそういう処があまり無い自由な感じの処が良くて、それは許されるのも子どもの特典だと思います。沢山失敗してもらい、色々経験してもらい、でも、それでわかっているつもりにならず、私としては視野が狭くならず、広がって行って欲しいと思います。失敗しても視野が狭くならず、でも、彼らと一緒にいると、考えたことをやるのは当たり前なので、そこで躊躇する理由は私にはよくわからないです。何かあればご相談に乗ります。

NPO 法人シャーロックホームズ

東：NPO 法人シャーロックホームズの東です。去年受け入れをしたのですが、今年はまちづくり団体の応募が多くて、ちょっと遠慮しました。今回アクターの皆さんと色んなことが出来なかったのがちょっと悔やまれるところです。来年はもしチャンスがあったら、やりたいなと思っています。今まで何年間か見てきて、当初、最初、この報告会で子ども達から挙がってきた声というのが結構大人に対する批判みたいなことが多かった記憶があります。それは、大人が全て作り上げたところに子どもがオマケで来ているみたいな。今日も少しありましたが、企画の段階から関わりを持つなど、まず大人が子どもと向き合っ一緒に作り上げて行くことを大人が理解していないまま事業が進んでいるという意見があったのが、今日の報告を聞いていると、皆さんすごくそれぞれの活動場所で、だいぶまちづくりの大人たちと色んな話をして、話が出来る処が少なかった所もあるかもしれないのですが、そういった、以前聞いたような批判的な感想が無かったなと思うのが印象でした。それは勿論、事務局のコーディネート力も、もしかしたらまちづくり団体に対するコーディネート力も、この数年でアップしていると思います。

多分その事務局の個人力があってすごくうまく運んできているのではないかと思います。皆さんが現場でそれぞれ大人に信用されながらとでない、なかなか自分の言いたも言えないし、やりたいこともやれないと思うのです。そういう大人達の雰囲気を作ってくれていることは、大人同士の中でも、特に岩室さんだったり事務局の中でだったり、調整してくださって、うまくいっているのだと思います。そういう環境の中で、また、来年も同じように事業をどんどん発展させていく訳ですけど。皆さんが今迄ずっと参加されている方もいると思うのですが、そのリピーター率の高さからも見ると活動し易くなってきているのではないかと思います。なので、ぜひお友達なり、色んな人達にそれを体験してもらえるよう声掛けを、この事業をもっと多く知ってもらえるように、結構 SNS 関係とかも上手く若い子達は使っていると思うので、この事業を子ども達の方からの発信で広げて行って戴ければいいかなと思いました。

神奈川県青少年課

竹本：神奈川県庁の青少年課の竹本と申します。まず皆さん今日は長い間お疲れ様でした。

本当に下手したら皆さんと少ししか変わらないような自分で、今日は一応大人側という感じなのですが、本当に今日一日通して皆さんすごく良かったです。それは本当に自信を持って欲しいです。意外と大人は、子どもに何かしてもらった後は、あの子良かったねとか、本当にあんな意見出るとはみたいなことを言っているのでも自信を持ってもらえればと思います。とても良い意見を幾つか戴いたりして、そう言うことをまちづくりの参加や商店街のお手伝いをしたりなどの機会をなかなか作れないので、そういうチャンスを下さいみたいな話を戴いたと思いますが、そういうのはやはり大人がちゃんと用意していかなければいけないなど改めて思いました。県の青少年課の立場として、そう言うことをやりたいと言えと言ふようなことは出来ないのですが、やりたいと思った時に調べたりしたら、直ぐに出来るような場所とかを用意出来たら良いなと言う風に思いました。

あと、すごく本当に大切なのですが、僕も本当にまだまだ子どもなのですが、小さい頃からマセガキで、大人って何なの？みたいな見方を少ししていたりして、なので意見の中でも大人と子どもの境界を作る人とかって言葉を聞いたりして、そうそうと思ったりしました。**大人の皆さんもすごく子どもの意見というのを尊重したり大事に思っていたりして、本当に境界は曖昧だなというのを改めて感じました。**なのですごく自分達は子どもだと思っているのかもしれないですが、非常に大きい力をもっているのだなと言うことを改めて実感していただければいいかなと思います。私も今年初めてこういった事業を知って見させて戴いたのですが、こんな仕ことが出来るととても良かったな、嬉しいなと思います。後は、交通費の件ですね。交通費の件は私達が直接出している訳ではないのですが、まあ、出来ればなと思います。ありがとうございました。

神奈川県青少年課

山田：皆さんこんにちは。竹本と同じく神奈川県庁の青少年課で働いている山田と申します。

今日は本当に長い時間楽しい成果発表を聞かせて戴きまして、アクターの皆さんもだんだんと段階を踏んで、頼もしい皆さんだと、本当にお礼を申し上げたいと思います。今年メイン担当させて戴いたのは、先程コメントさせて戴いた竹本なのですが、社会人1年目にして立派なコメントをしたので、先輩の私が出る幕はないかなという感じなのですが。去年私はアクターをメインで担当させて戴いて、去年は鋼管通商店街にお邪魔してアクターのお手伝いをさせて戴きました。今年は鋼管通り2年目ということで、**地元の子供達を巻き込んで更にパワーアップしている**感じがして、とても嬉しく思いました。本当にありがとうございました。

ここでちょっと神奈川県からこの場をお借りして一つご案内させて戴きたいことがあります。神奈川県では神奈川県青少年育成支援指針という、なんだかちょっと堅い指針なのですが、要するに青少年の皆さんが健やかに成長する為の支援としてどんなことをしていったら良いのかという、道標のようなものを調べています。その道標、平成17年、丁度10年前に定められたもので、この5年後、22年に見直し改訂をしているのですが、更に5年経った今年、2回目の見直しをしている処なのです。この5年間を見て、皆さんに関係する処で言うと、例えばスマートフォンが急激に普及して、子ども達の中にもスマートフォンが普及してきたのです。また、いじめを防止する為の法律が出来たりだとか、5年間の間にとっても社会が変わってきています。この変化を踏まえて、今後どういう改訂をしていったら良いか

という、改訂草案というものを県の方で作りまして、丁度この12月18日からパブリックコメントという制度も、県民の皆さんからのご意見も戴きたいというものを募集しています。来年1月18日迄広くご意見を募集しています。この改訂草案の中には今日のような子どもの社会参加を推進しましょうというようなことも書かれていますので、大人の皆さんもぜひご意見を寄せて戴きたいのですが、子どもの皆さん、当こと者として関わりたいというご意見承りまして、本当にそうだなと思っています。子どもの皆さんからのご意見も募集しますので、よろしくお願いします。

岩室：ありがとうございました。予定の時間を過ぎてしまったのですが、最後に三輪さんにお話を願う前に、一言石井さん、ずっとアクターに関わってきてお手伝いされて、石井さんも何か感想をもらっていいですか？

石井：はじめまして。私はアクターができてから高1からやっていました。今年高校を卒業して今はスタッフ側としてアクターの子達を色々お手伝いしています。でも手伝うことよりも今のアクターの子達からすごく学ぶことが多いです。今回、自分からやりたいという子が結構多くて、自ら先輩たちを引っ張ってくれるような子達が多いので、これからもアクターを続けて頑張っていって欲しいなと思います。上手く纏められず申し訳ございません。

岩室：いえいえ。今はどんな勉強を大学でしているのですか？

石井：今私はコミュニティデザイン学科という学科に在籍しています。まちづくりとか、そういうものを学んでいて、ただまちづくりと言っても住みやすいまちづくりだけではなく、人とつないでいくようなことを学んでいて、私は将来何をやりたいか決まっていらないのですが、色々な人を交えて色々な地域を活性化させていけるような人に、将来なりたいなと思っています。すみません。

岩室：ありがとうございます。

三輪：みなさん、長時間にわたってお付き合い戴きましてありがとうございます。4年目です。毎年この時期の報告会では、活動最初のお見合い会の頃とはちょっと子ども達の雰囲気が違う、子ども達という言い方もいけない位、成長していると思います。その成長をしているのはまちづくり団体の皆さん方とのやりとりだという風に思います。やはりこれは両者が一体にならないとできないということが今回改めて確認が出来たかなと思います。今日すごく印象的だったのは、非常に実は子ども達自身もすごく見て戴ければわかると思いますが、一人の子が色々な所に行っていたりする訳です。色々な所に行くと見比べてしまう訳です。その中で物すごくここはこうだったのに、あっちはなんでうまくいかないの、この雰囲気はこうなのに、なんでうまくいかないの、この商店街はこうなのに、なんであっちの商店街はうまくいかないのみたいなことは多分彼らなりに考えただろうし、それがこうだったらいいのという探求力が付いている感じです。特に年代の高い子の方が的確にその辺を指摘出来ていたと言う風に思います。これはすごく街を見る上で、鳥の目で別の視点から空間を見たときに培うべき非常に重要な能力で、それが身についてきていることに私は非常に感動しています。一方で最初に言いました大人側が、子どもをお客さんにしないと言うことを願う為にはまちづくり団体のお見合い会の時には、ぜひ自分達の置かれている過酷な環境と言うか、課題を子ども達にも赤裸々に説明してあげて下さいと、こういうことを困っているのです、ということを書いて下さいという風にお願いをしています。つまり両者がお互いにこうなんですよと、お客さんにしない為には子ども達自身にここが問題なんだよと、どう思う？どうすれば出来ると思う？という投げ掛けをしてみて、最初の一席が一番重要で、そこ

ら辺が今回キャッチボールが出来たことが多いのかなと言う風にも理解します。なので、一番先程申し上げたように大人が子どもをお客さんにしない力量を、この事業を通して子どもと一緒に培って行くのだなと言うことを今回物すごく、なんとというか、子どもたちとのやりとりを見ながら発言など、その辺を見ながらすごく達成感が得られたかなと思います。後はこれをどう言う風に事業を推進していくかというところが、推進会議とか私達、県の関係各所の果たすべき役割だという風に理解しましたので、次年度に向けての次のステップアップに進みながら、この方法論をもう少し研ぎ澄ましていきたいなと言う風に思います。今日は本当に最後までお付き合い戴きましてありがとうございました。それから子ども達もご苦労様でした。では最後に、全員立って皆さんに向かってください。最後にアクターたちが自己評価してくれます。アクターになって何点かという自分の自己評価をします。100点満点中何点自分は達成したか、成長加減を。それを会場の皆さんに掲げて、私にではなく、向こうに掲げます。こんな感じで頑張りましたということで掲げて終わりにしたいと思います。いいですか、いっせいのせで、そちら側から何点になるのか見ていてください。はい、ではご苦労さまでした。私達こんなに頑張りましたとき、はいっ。挙げてください。私に見えないように。

岩室：3点から最高95点です。100点はいません。

三輪：3点から最高95点ですか。3点はどうしてかな。

岩室：参加出来なかったようです。

三輪：そうか、参加出来なかったらちょっとね。皆忙しいからね。でも95点、概ね70点以上でしょうか。はい、と言う自信をもって今期を終了したということで、ご苦労さまでした。ではこれで報告会を終わりにしたいと思います。ありがとうございました。